女鑑

明治三十三年二月二十四日發兌

第百九拾九號

東京國光社

女鑑第百九拾九號

目録

女鑑臨時發刊豫告

我が神州の淑女をして滔々として輕佻浮薄にのみ趨らしめたりし秋にあたり本社同人衷心深く憂慮する所あり明治廿四年八月本誌を發行し女教の要專之を**萬邦無比**なる歴史に徵し之を祖先の遺範に稽へ**優麗貞淑**なる日本女子固有の特性を啓發することを本旨とし以って忠良なる日本臣民の**賢母良妻婦女子**の**伴侶**たらしめむことを務めてより年を閲すること九年號を重ぬること百九十八號に及びぬ今や世運の推移は海内諸般有形の事物概皆舊觀を改め更に國威の伸張は内外の人雜居して等しく大御稜威に賴るにいたれりまことに**前古未曾有**の時期に遭際せり是に於いてか吾人同人の益々奮勵盡碎を要する者また多く加はりぬ玆に三月五日發行すべき本誌第二百號を**臨時發刊**となし女子問題に熱心なる諸家の剴切精覈なる意見を蒐め又厚く**賞**を**懸け**て緊切なる問題の解釋を求め汎く歌文を募りて其の精を選び萃を集め以つて大書册となし一は刻下の急に應し一は多年愛讀者諸媛の厚誼に酬いむとす

こき女　つゆ女



敬みて祝ぎ奉る

かけまくも畏かれど　神武天皇の大八洲國の、國の眞秀なる國の眞中に、大都を遷させ給ひて、天の下を知ろしめさせ給ひし日より、二千五百六十年の紀元の佳節にあたりて、

東宮妃殿下として、九條侯爵家姫君を納れさせ給ふべき御事を定めさせ給ひて、天の下、四方の國に、宣り知らせたまふ。

斯る御盛典を擧げさせ給ふべき折に、生れあひたる民衆のうれしさは、何にかはたぐへむ。

東宮殿下の、至聰至明におはします御事、姫君の、至貞至淑にわたらせ給ふこと、今更申さむは中々に畏かるべし。たゞ敬みて國家の大慶事を祝ぎ奉る。

能はざるにあらず爲さゞるなり

自を輕ずる者ばかり、世に益なきものはあらじかし。謙遜の美德は殊に女子におりては缺くべからず、驕慢もとより見るに堪へざる惡德なりといへども、自を重うすることは、決して謙德を毀くるものにもあらず、また、强ち驕慢と伴ふものにもあらざるなり。

世には、自ら、自をいたく輕しめ、何事をも爲し能はざるものとし、到底他と伍する能はずと定むるもの尠からず。むしろ憫然なる人々といはざるべからず。

世の中のありとある事業をならふにつけて、たとへ、如何なる末枝なりとも、まことは、充分足れりと思はるゝばかり、ならひ得るものあらむや。或る程度に達すれど、其の上に、其の上に達すれば、更に其の上にと、さて、何事か、滿足の時期は遂に來るべきにあらず。世をそこなひ、道に悖れる慾望こそ、極めて少き程度にて止めおくべきものなれ。其の他に於いては、斯の不足々々とおもふ心、いかで、成効に近くべき唯一の道なるをや。

勿論不足とおもふ念慮あるは、多少求むるところあるが故なり。自を重ぜねばかりならばまだしもあれ、輕ずる人々には、更に求むることなく、爲さむとすることも絶えてなければ、遂に不足と感ずることもなし。唯、他のするごとく衣服をまとひ、他のするごとく食ひ、また、他のするごとく言ふにすぎず。斯の如きは、必しも世に害ありとはいはざれども、決して、また、世に益ある者にあらず。天下豈に無益のものを要するの理あらむや。一年の計をなす能はず、徒に他の救助を仰ぎ、辛うして生命をさゝへ、人に齒せられざるもの、畢竟、自を輕んずるよりいてたるなり。十年の節を守る能はずして、空しく他の翫弄物となりをはり、人に指彈せらるゝもの、即ち、自重の心なきが故に然り。

簷より滴る雫も、遂に幾尺の巖石を穿ち、一挺の鋤も、以つて千丈の大山をうつすに足る。何物か、成さむと欲して成らざるものあらむや。何事か、成さむと欲して遂けざることあらむや。愚公の譚、以つて鑑とすべし。

女子たるもの、すべて、斯の心を持し、さて柔順謙遜貞淑の德を養ひ、其の本分を全うせむことをつとむべきなり。



日本女子今後の覺悟（十五）

三輪田眞佐子

淡水交情老始知。とは白氏は詠ひけり。實に友たる道を全うせんとならば、互に淡きこと水のごとくなるべし。若し、陽に醴の如く甘からんか。いつしかその味の移ることなきを得ん。彼の巧言令色の人は、一見良友と思はれんも、一朝、その志を充すこと能はざれば、あはれ、俄に行路の人も啻ならざるに至るべし。況して口に蜜あり、腹に劍ある人の恐しさよ。

されば世辭を巧にするもの、亦は、佞辨を弄するものに、善友は絶えてなからんかし。唯内に赤誠の積る人、心に和氣の充つるものこそ、敢て、我を歡ばさんとつとめざれども、その沈默、いよよゆかしく、たま〳〵、その濃かなる交誼の情、外にわざとならずして洩れんか。忽ち人をして彼と金蘭の友たらむやと欽慕せしむるに至るべし。古語に蓋を傾けて舊のごとしと、信に人情の温かなるものは、不言の間にすら、人心を懷かしむるに足らん。

然るに、世の所謂交際家を以て任ずるものを見るに、おのづからならざる微笑を作り、ことさらなる和音を出して、衆人の斡旋するを以て、交際の能事終れりとなし。これに伴ふべき精神の修養を顧みざるがごとし。蓋し顏色を和げざるときは、人のこれに近づきがたきより、先づ外容を穩かならしむるは、交際上必要なりといへども、おのれ

は、和氣の現れて艶容となるこそ、更に望ましけれ。

女子の交際上につきて、最も改良すべき點と信すべきものは嫉妬の念を去るにあり。そも〳〵女子は胸襟挾きを以て、徒らに他人の美事を羨み、遂には、陰に、その位置の我れに長ずるを惡み、その名望の、我に過ぐるを誹りながら、その人の顔面に於いては、二つとなき友こそ君なれなど、甘言を述ぶるものもありとかや。故に女子は、斷然嫉妬の念を去るにあらざれば、互に胸襟を開き、肝膽相照すと言はんばかりの信友となること能はざるべし。

なべて、世俗の友は、その位置職業、及び、年齢など、ほゞ相同じきもの丶間に多からんも、深く考ふれば、或る事情のため、互に往復するに過ぎざるものなしとせず。苟も、其の知己と言ふべきものは、意を相投合するにあり。故に、故松尾たせ子の君は、おのれより長ずること三十才にあまりけるが、終始信友として變らざりけるのみならず、その子孫に至るまで、今、なほ親戚の如く相交れり。その他、おのれの幼きころ、野邊に遊びてともに菫などつみける友にて、既に鶴髪の姿となりしものにて、交を改めざるもの多し。されば、友は全く、心を友とするものならんか。こはおのれの實驗なり。讀者もて如何となすか。

交際は、孤獨の生存を好まざる人情の自然より發するのみならず。なほ、人の世俗を行くは、さながら友千鳥の、互に呼びつ、呼ばれつ、荒磯荒浪をかきわくるごときものなれば、誰も交際なからんか。一日だに安く世を過すこと能はざるべし。されば、交際の目的は、相提携して、人生を全うするにあり。唯怪むべきは、交際上より思はぬ仇

を作るもあり、そは如何なる故にか。思ふに交際の主なる手段となるべきものは言語なり。然るに、口は禍の門とて、そのため、互の感情を害し、あるは、他人の身上を話柄とせしより、女徳を破ることさへあり。されど、交際につきては、第一話柄を研究せざるべからず。

おひしきてとりかへされぬ言の葉を
たやすくはなつ人のおろかさ

女子原勢力（承前）

大日本女徳會（未來）會員　秦　政子

女學界に望む

男女同一の學齢にして幼稚園及び小學の義務教育年限幷に高等小學の時代迄男兒に異ることなきは、是れ全く人爲の私にして稟性の天則に背けるならじか。妾が希ふ所は初めより年齢學年を異にし男兒よりは、輕減して、之に代ふるに實用適切の學科、則ち裁縫の外に普通應分なる調理割烹等總て家政の助手たるべきものを以てし、高等小學科の二學年を高等女學校に讓りて義務教育を三年とし、滿六歳より（男兒は七歳より、此等の理由は別に論ぜん）十一歳までとし、中流以上の女兒は、必ず第四學年卒業の後高等女學校は進學せしめ、滿五年間則ち十六歳まで高等の學科を修めしめんと欲す。蓋し女子は十六七歳に至れは在學し難き情あれはなり。されども、是は卓上の普通論にて、山村避邑の單級學校などにては望むこと能はざる所もあり。斯る學校にては男女交換教授、或は獨逸に行はるゝ半日學校の制を採るも可なり。但し滿五歳より、一ヶ年は家庭、又は幼稚園にて豫備教育をなすべし。然しながら今日の有様

にては、未だ家庭の教育は望み難ければ、成べく幼稚園に入るを可とす。又小學校のみにて終る者は、必ず六年の義務教育を受けしめ、就中下層の女兒にて、貧困なる者に限り、町村郡費、又は地方費、或は國庫の補助金を回歸して、其の授業料乃至、總ての學費を支給したし。次に高等女學校よりは、英語の初歩養蠶模範教授、機織、毛絲、紡績法改良結髮法方等適當の學年に加設し、且つ女學校は可及的女教師を要するが故に、各地方に女子師範學校を設けて、小學の教員となし、高等女子師範學校を改良して、地方女子師範學校、及、高等女學校の教員を作らんことを欲す。さて女子小學校の學齡學年及、學科時間配當は左表の如し。

女子小學校學齡學科假定表

義務年限六ヶ年

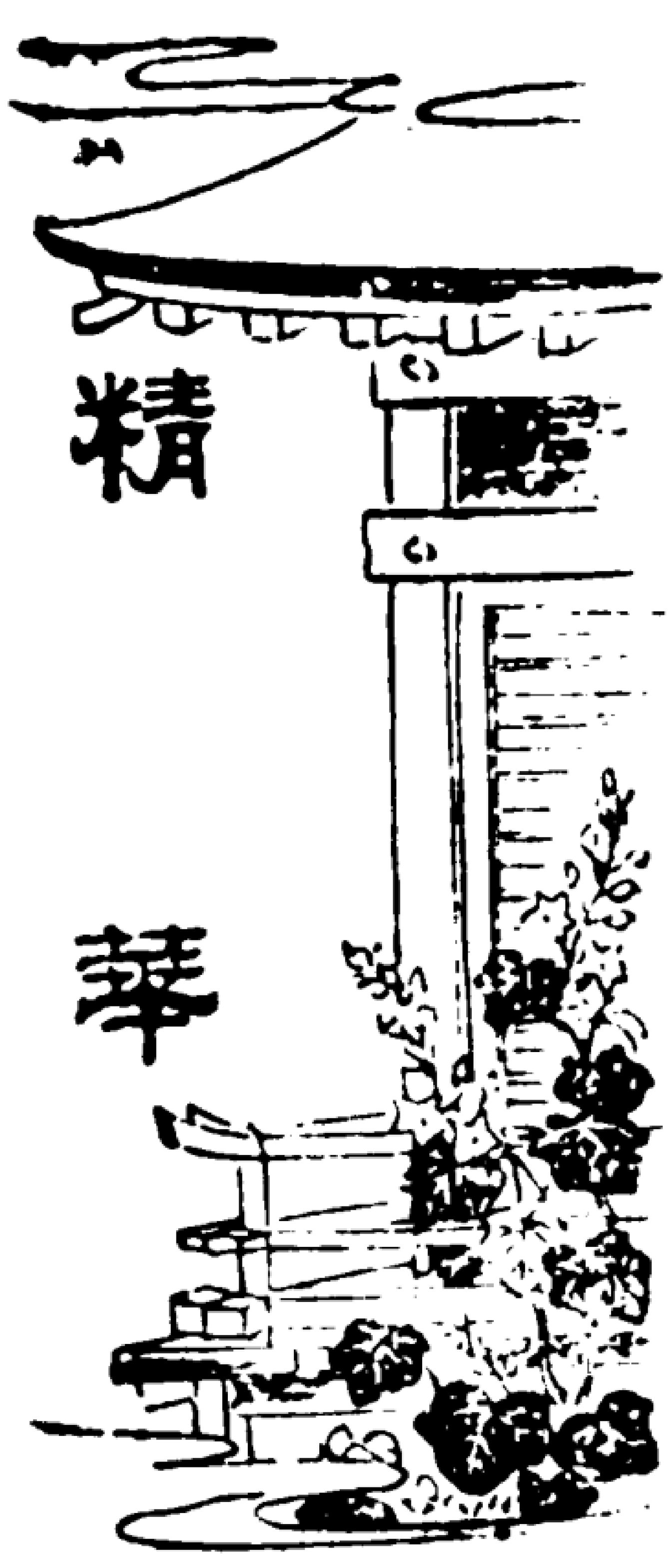
年齢	十一	十	九	八	七	六	五
學年	六	五	四	三	二	一	

全學年時間配當假定表

但し、一學年は、四五科を減じ、二學年は、二三科三學生は、一二科を減じ、四學年より全科を課し、修身科に於いて、地理歷史等を應用教授す。

	第一時	第二時	第三時	第四時
月	修身	國語	書取	裁縫
火	作文日用	算術	體操	調理
水	國語	圖畫日用	會話日本	割烹
木	修身	禮法	體操	裁縫
金	算術	國語	作文	習字
土	習字	算術	體操	裁縫

女子師範學校以上の學制、並に一般教授法等の理由は、玆に略しぬ。



貞淑

凡、男女の間は、必、其の別を嚴正にし、決して、混亂せしむべからず。若、男女混亂して、淫靡の俗、次第に增長して、德風、地を掃ふときは、終には、國家の衰弱をも來たすに至るべし。故に、古人も、男女の別は、國の大倫なりといへり。忽にすべからざるなり。

而して、別を正すには、幼時より、其の慣習を養ひ置かざるべからず。古の禮に、男女、年長じては、席を同じくせず、衣裳をも、同じ處に置かず、同じ處にて浴せず、夜行くには、必、燭を持ちて行くべしといへり。其の用意周到なりと謂ふべし。又、他人の間は更なり、たとひ、夫婦兄弟の間にても、別を正しくして、決して親狎すべからずともいへり。夫、夫婦の間は、和合を尙び、兄弟の間は、友愛を主とす。而るに、猶、其の別を正しくせずして、漫に親み狎るゝときは、德を傷ひ、倫を破りて、竟に、其の親を全くすること能はざるべし。況や、夫婦兄弟ならざるものをや。汝等、常に、飮食坐臥より、些細の事に至るまで、よく注意して、其の別を正さゞるべからず。

凡、男女の間は、已むことを得ざる外は、なるべく、言語を交へず、席を同じくせざるを宜しとす。而して、其の交際するに當りては、互に禮を正しくし、言語を愼みて、一擧一動にも、禮節を守る

べし。而して、男子は、深切にして、女子をいたはり、女子は、恭敬にして、男子を尊みて、假にも、戯言を弄び、親狎することあるべからず。世には、男女の交際を奨むるものすらあれども。是、皆、異風の邦俗にして、徳を傷ふべき虞あれば、心あらんものは、謹みて、我が國固有の禮法を失はざらんことを勉むべきなり。

凡、男子は、剛健勇武を徳とし、女子は柔順貞淑を徳とす。此れ二者、相須ちて、人生の和樂を成す。故に、男子は、益、剛健の徳を養ひ、女子は、益、貞淑の徳を養はざるべからず。然るを、男子にして、好みて、女子に親むときは、必、柔弱遊惰に流れて、剛健勇武の徳を失ひ、女子にして、好みて、男子に狎るゝときは、必、輕佻浮薄に陷りて、柔順貞淑の徳を失はん。深く戒めざるべからざるなり。

又、女子は、一旦、人に嫁したらんには、夫の家を我が家として、浮沈を共にすべし。古に、嫁ぐことを歸るといへり。是、我が家に歸る義なり。人の婦たる者は、夫の家を措きて、他に、我が家とすべきものあらざれば、出入起臥、皆、之を中心とせざるべからざるをいふなり。故に、榮枯盛衰によりて、心を變せず、いかなる艱難に遇ふとも、節操を更ふることなく、益、其の志を固くすべし。然るを、夫の家の、貧苦に陷るを見て、我が身、後來、心身を安んずること能はずと思ひ、或は、夫の無能にして、立身の目途なしとし、或は、舅姑の嚴格なるを恨み、夫の兄弟姉妹と爭ひなどして、自、其の家を出づるもの、世間に、往往、之あり。輕薄の人情といふべし。是、一に、夫の家を、我が家と思はざるに生ずるのみ。假令、其の家、貧困に陷り、如何なる辛苦艱難に遭ふとも、其

是、我が家の事なり。我が身の責なり。我に逃るべからざる事なりと覺悟して、之に當らんは、人の妻たるものゝ當に務めざるべからざる所なり。又、人の婦たるものは、常に、品行を方正にし、如何なる變事にあふとも、堅く、節義を守りて、其の德を汚すことなかるべし。女は、常に、柔順を主とす。然れども、時變に際しては、利慾にも誘はれず、威武にも屈せられず、死を以て、其の守る所を守りて、其の面目を保たんは、婦德の最重んずべき所なり。之を、節義といふ。節は、みさをと訓じ、常に、守る所ありて惑はざるをいひ、義とは、事の宜しきに適ひて、正當なるをいふなり。もし、楫無き船の如く、風波の隨に漂蕩浮泛して、情慾の爲に、其の操を變じ、利害の爲に、其の心を二三にせむ、女子たる面目、いづくにかゝるべき。古より、節婦烈女の、危きに臨みて懼れず、刑戮の爲に動かされず、凜然として犯すべからざる節義を持して、以て、其の德を全くし、名を汗青に垂れて萬世の龜鑑たるもの、甚多し。事變に遭遇するは希有の事なれども、節義の心は、常に、之を養ひて、平時の事に應用し、萬一の變に處しても、其の道を失ふことなからんことを心がくべきなり。

豐後國孝女傳

猿田こち子

孝女二人、姉をツユ、妹をトキといひき。豐後の國臼杵領(城主稻葉伊豫守)大野郡川登鄉泊村の農民初衞門か娘なり。初衞門家貧しかりしに享和中妻に死なれ、(此の時ツユ年七オトキ年四才)わが手ひとつにて、二人の娘を養育せり。ツユ拾四歲の時にいたりて、隣村の

直八郎といふ者に嫁かしめ、其の年、家をば、弟某に譲り、次女トキを託して、廿四輩舊跡巡拝の志を起し、家を發して、故郷をさまよひいでぬ。かく諸國を遍歴し、終に常陸國に來り、久慈郡東蓮寺村（當水戸領今は山田村に屬して東連地と改む）青蓮寺の庵室に留まること七年、剃髪して、敬西といへり。途中にて、下疳を患ひしが、七年を經て、瘡毒、大に發し、足腰肉たゞれて起つこと能はず。青蓮寺院主ねんごろにいたはりて、療養せしむれども効驗も見えざりければ、便宜を求めて、書を豐後の國におくり、こまゞゝと、其の病狀を知らせぬ。これより、彼の地よりも返書を送り、互に音信を通ぜしといへども、行程三百里、ツユトキの姉妹は、唯父が病苦を思ひやり、日夜憂ひかなしむのみなり。時に文化八年辛未の春、京都本願寺祖師の五百五拾年大法會のことありき。國々の末流門派、すべて法筵に集る。豐後の國の善生寺住職も、亦、上京して旅亭に在り。たまゝゝ青蓮寺院主と會し、談して初衛門が事に及ぶ。即ち、共に、其の病狀を語りて、家人に告んことをもとむ。善生寺之を諾し、歸國の日、初衛門の親族に向ひて、病狀をいふことまのあたり見るが如し。是を以てツユトキ姉妹、いとゞ父の身の上の心にかゝりて、堪へがたく、七月中旬、二人、ひそかにはかりて家を出で常陸國におもむかんと、一日の中に拾里余を走りぬ。親戚郷黨、驚きて道を追ひ、尋ね求め誡めて曰はく、常陸は、東國の里にて、海陸三百里あまりの路にて、男子すら猶容易に到りかたし。況んや、婦人の身にて、殊には路資の貯もなし。何ぞ生きて彼の地に到りつくことを得むや。父の生死も知るべからざるに、汝等さへ、若し不幸あらむ、如何すべき。しかず、速に家に

歸へり、業をいとなみ、永く、父の追福をなさんにはと。二人理に伏し、一度は家にかへりしが、つら〳〵おもへらく、父遠國にありて病にかゝり、他人の養ひを受く、子たるもの安閑として居られむや、たとひ死すとも、常陸におもむきて、一度、父に邂はむ。臼杵より船にて行かむ、人々追ふといふとも得べからず。八月十一日夜の間に忍び出で、臼杵の津に至りぬ。ツユの夫、直八郎、又貧しきか爲に、臼杵に出で、家士某に仕ふ。然るに去年主人某、病死し、相尋いて、其の妻もまた病死せり。十一歳の男子一人殘れるのみなり。直八郎去るに忍びず、よくこれに仕へ、忠を盡くして、臼杵にありき。廿日二人は、直八郎がもとに、こま〴〵と文をおくり、ツユは、ことに御許をまたで、長の旅路に出でむ不貞の罪をねもごろに詫びやり。應對に及ばずして、直に津に走り船を出せり。直八郎驚き、跡を追ひ、津に至りし時は、船既に汀をはなれたりき。互に相呼て別をなし、九月朔日に大坂に着船す。先づ京都に至り、本願寺に詣づ、父の病愈えず、我等二人も、亦、道路に死せんか。跡吊ふべき人もなし。是に於いてともかくにもとて、上衣一枚づゝを脱去り、錢六百にひさひで本願寺に寄進し、後生菩提の事を請ふ。本願寺門主、いたく其の志をあはれみ賞で、六百錢を收めて、酒盃を給ひて、賞せられきとぞ。これより二人は、東海道を經て、家々にもとめ、往來の旅客につのり艱險身にせまるといへども、孝感のなす所人々、是をあはれみ助けて、夜とて山に伏す事もなく、日として飢渇の憂もなく、藤澤の驛に至りつきぬ。此の日稲葉侯の家士某とて、東都に下るがありけり。二人を見て怪み問ひて、其の事情を聞き、甚不便がり、即ち二人を、東都

に伴ひ、おのが旅亭に止宿せしめ、書を添へて常州青蓮寺に寄せらる。十月上旬、東蓮寺村に着きて、父子遊ひ見えぬ。其の喜びいかばかりなりけむ。わかれてより、凡、八年殊に行程三百里、婦人の身にて、尋ね來らむこと思ひもかけらるべきをかは。衆人、皆感歎して、其の談暫くも止まず。

此の事いつしか、公廳に達し、大里の郡廳に召して、金、及び、衣食を給ひ、村官に命じて、厚く養はしめらる。又水藩寺社の官廳に召して、金を給ふ。さらぬだにあるを、公よりの命さへあり、これよりは鄕人きそひて、金、或は、その他種々の贈物して、厚く、父を養はしめ、詩、若くは、歌を寄せて、賞するものも尠からざりき。家を出るの日、死を期してこそ、漸く、此の國に來つれ。かゝる仁政の德澤を蒙むるは、ひとへに、これ天の

我等を助け給ふならむ。さりながら、永く厚恩を恣にせむも恐多し、速に歸國せんと官廳に願ふといへども許されず、嚴寒の時節遠路、病父の身堪へがたかるべし。春暖の時を待ちて、送り遣はすべきよ。かたじけなき命あり。二人は、僅に春を待ちつゝありしに、父の病も、また愈えければ、二人の喜びたとふるにものなく、水藩士家の爲に送られ、鄕人が涙と共に見おくられ、父を助けて、本國に歸へれりとぞ。時に、初衛門年四十七、ツユ年廿二、トキ年十九なりきといふ。

我、常州東連地村より、豊州泊村まで、海陸三百里と聞く、我家は、代々東連地村に住す。文化中、わが祖、猿田敬といふもの、里正たりしが、故に孝女二子を、我家に迎ひて、療養せしめたりと。また孝女國字傳一卷を録して、今猶ほ、孝女二子が事蹟の世に出でざるを嘆くと共に、後の今を見ん事、猶今の古を見るが如く、此の書を見て、志を起さば、身を立つる一助ともならんかと、拙なき筆にあらましを書きつけてかくは。

源義朝の女夜叉

山本正周

源義朝、嘗て、美濃の國青墓の驛なる、大炊といへる者の女延壽を嬖して、一人の女兒を設け、其の兒は、母の手に養育せられけり。かくて、平治の亂に、義朝は都にて敗軍し。東國さして落行きける時、女にとりては、異母の兄なる頼朝は、延壽の家に一宿しければ、女は大によろこびて、厚くもてなしけるに、頼朝は程なく平家の手に捕はれける由聞えければ、女は深くかなしみて、われとて左馬頭殿の子なり、生きながらへて、憂き目を見むよりは、兄上と同じく刑を受くるこそよけれといひて、將に走り出でむとしけるが、いづれも、之を喩し止めしにより、一時は思ひ止まりたれど、後ひそかに水に赴きて死せり。此の時、年わづかに十二歳なりしとぞ。



女禮

銚子提子披き酌取樣

有住常子

先、年始諸祝義等、長柄提子の酌は、すべて披き酌にするなり。本酌長柄を持出つるものなり。銚子を横にして、右手にて、菊金の所（長柄の上のつぎめに打たる丸き金を云ふ）を下より持ち、おや指は、上より、びやうの頭を持つべし。左手は、ねこ足（長柄の末を折りまげたる疊ずりの所を云ふ）を下より持ちて出で、先下座に座すべし。

此の時長柄は、ひざの前に、横に置き左手ばかり、左ひざの脇につき、右手は、猶粥金を持ち扣居るなり。加の者は、提子の口を向にして、右手にてつるを下より持ち左手を提子の下に入れて受け、本酌のあとにつゝき出で、御次御しきへ外へ、本酌にならひ座すべし。此の時提子の口を向ふにして、ひざの前に置き、左手ばかり左脇につき、右手は、猶つるを持つべし。時宜を見合せ、本酌貴人の前に出で、ひざまづき、御様子伺ひ、御盃御持ち遊ばされ候はゞ、二ひざ進み、御酒をつぎて立時は、いつも上座の方に向ひて立べし。御酒を加ふる時は、下座に下り、盃のある方に、本酌座す。其の時、加の者右ひざに立ち、本酌と向ひあひに座す。その節、本酌両手にて、長柄を進むる。加へをはり、本酌上座の方に向ひ立たる後、加の者は、下座の方に向ひて、立ち、元の所に座すべし。御酌すみたる時は、前のごとく、本酌、加とあとに付き、しづかに御次へ引くべし。又三々九渡五献三献の、御酌等、すべて、此の心えにてよろし。

臨時の客の應接（八）

三石直子

見はからひ、御飯を替へむと通盃をさしいだし、すゝむれども、客人より、御辞義なしに頂戴いたしたればなど、挨拶あらば、強ひてすゝめず、そろ〳〵と通盃を引込ますべし。

さて、飯鉢を元の座へ引置き、茶土瓶を盆に載せたるまゝ、通盃を持添へ、客人の前へ持出で、自分の右の脇に置き、通盃を客人の膳の右の方へ出し、茶碗を受取り、茶を酒いで出し、元の

座へひくなり。
客人茶も喫みをはり、箸もをさめ、主人への挨拶も濟まで、主人より給仕に、御膳を引くべき由、命せらるべし。
其の時には、前の通、飯鉢と通盆とを持添へ、勝手方へ下げ、茶土瓶を盆に載せたるまゝ下けて、湯を少し入れ、火にかけおく樣、勝手方の者に談じ置き、それより座敷の酒の肴の類を下げ、膳廻の小皿茶碗の類を下ぐべし。
膳廻のものを下ぐるには、かさ高にならぬ樣に程よく、客人の分よりして主人の分まで、殘らず、追々に、盆に載せ下げて、すべて洗ひ置く樣に勝手方の者に談し置くべし。
先づ客人の膳を下げ、次に主人の膳を下げ、さて、茶をタップリと汲みて、主客の分とも一緒に盆に載せ、納敬を添へ持出で、一つづゝ、納敬に

て、前の通、客人と主人とへ出し、納敬は盆へ載せ、次の間の壁際か襖際かに置き、盆は勝手方へ下ぐるなり。
この時に、煙草盆の火鉢の火などに心づけ、前のとほり、客人の前へ直すべし。火入の火消えかかりたらば、前に言ひし如く引替ふべし、火鉢の火少からば、炭取を兩手にて持出で、火鉢を少し手前の脇へ引寄せ、手ばやく炭を裝置て、根元の灰を平し、火鉢の縁など流塵を、釜ふきなどにても、自分の鼻紙などにても、よく拂きて客人の前に出すべし。
斯く、膳、其の他の者を下けをはりたる跡にて、もし、疊にこぼれし物などあらば、鼻紙二三枚懷中より取出し、拂きおくべし。斯樣の際に給仕の者、鼻紙の持合なく、迷惑することあり。主人より常に心づけ、右樣の迷惑なからしめぬ

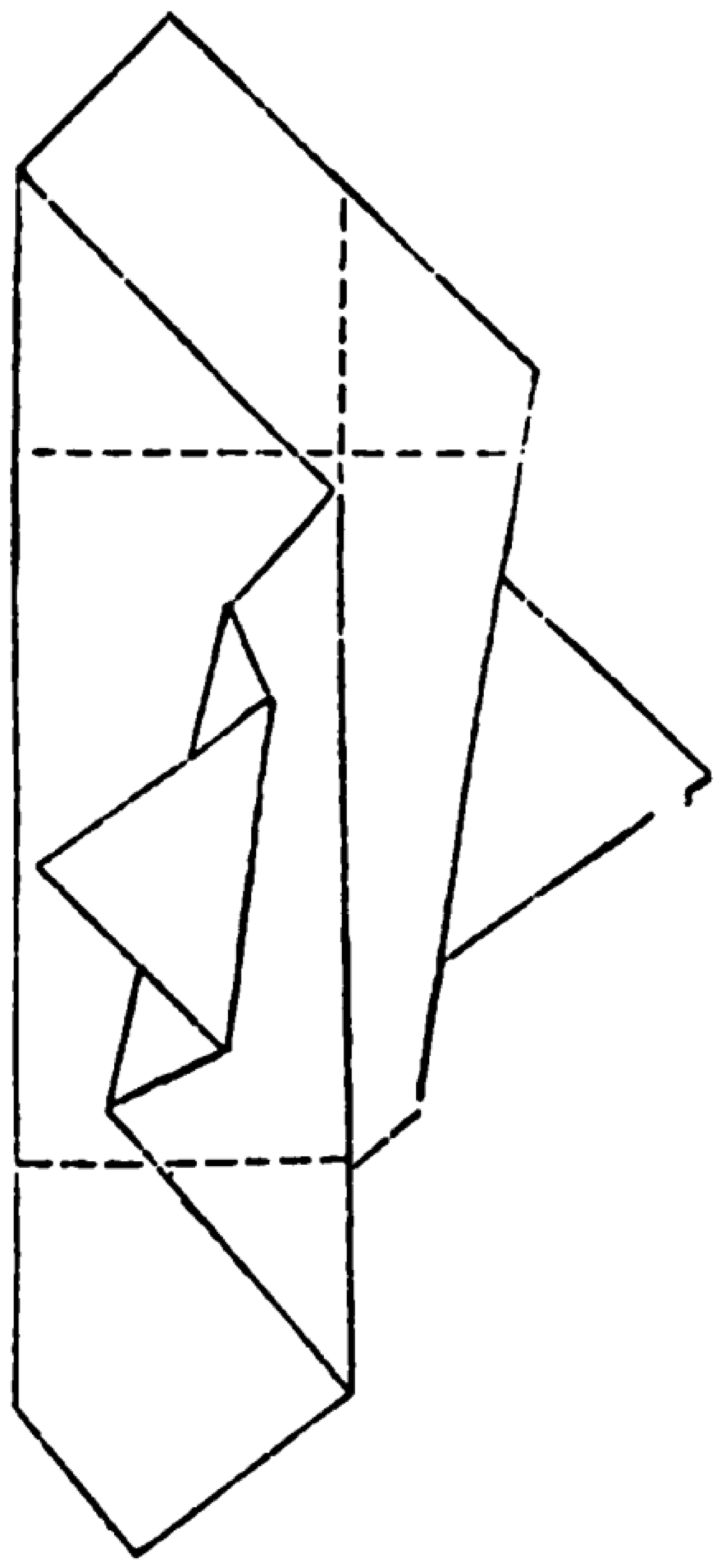
樣、注意し與ふべし。

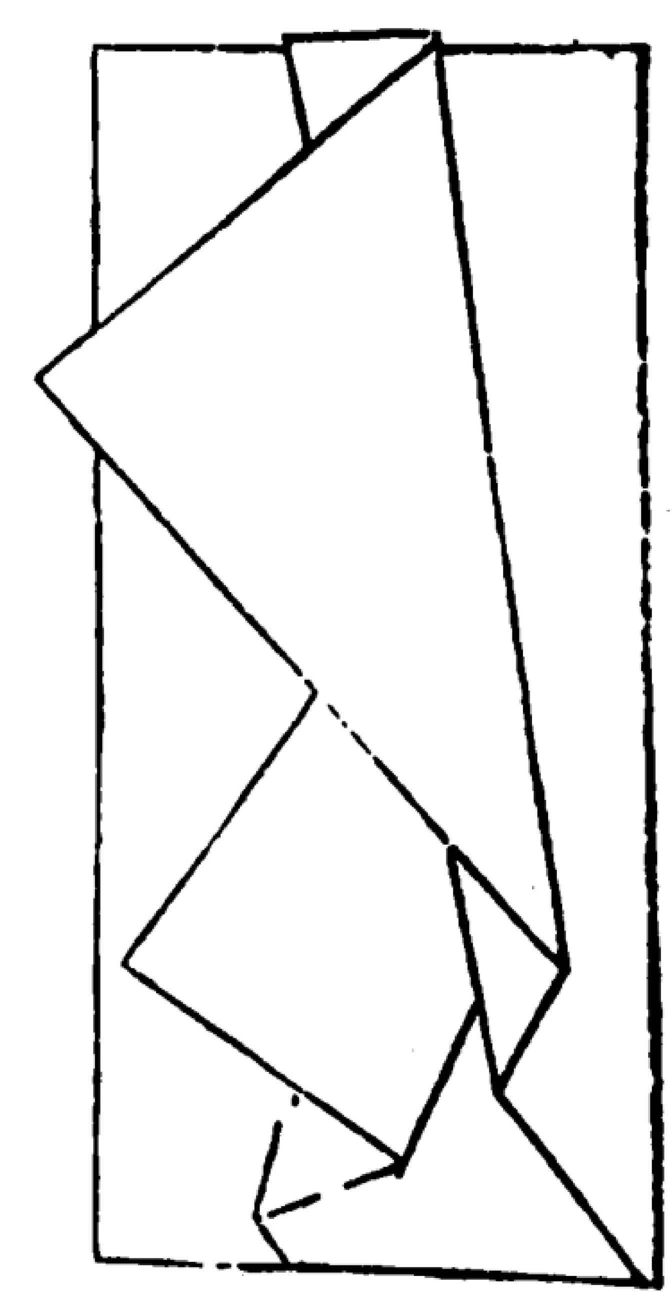
折方

眉はき包（草）

有住くわう子

是は前號のに同じ、たゞ、手がるき所、又は、下輩などに遣はす時に用ゐる包みかたなり。例の如く水引をかくるなり





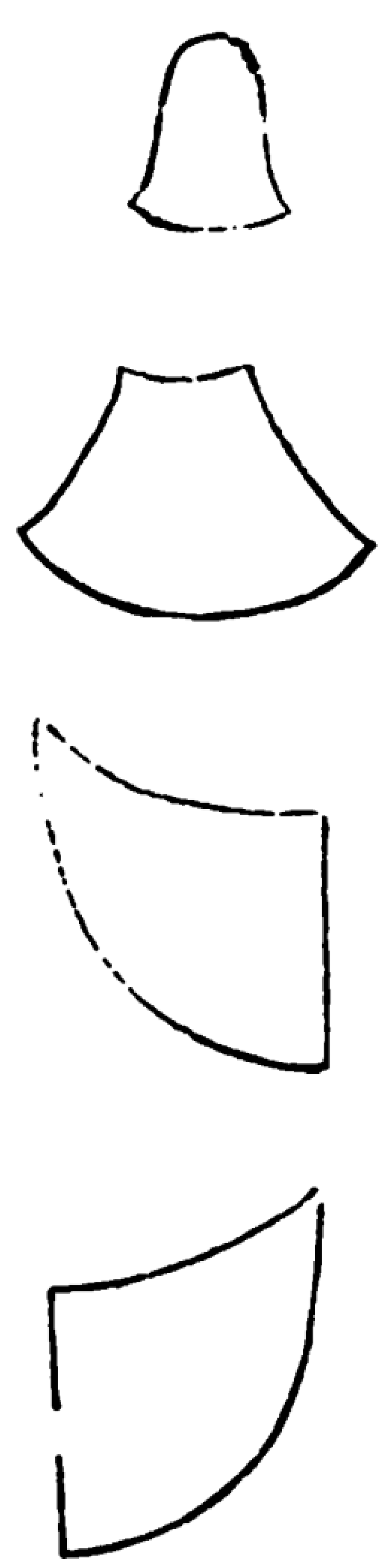
たちぬひ

脊負守（つゞき）

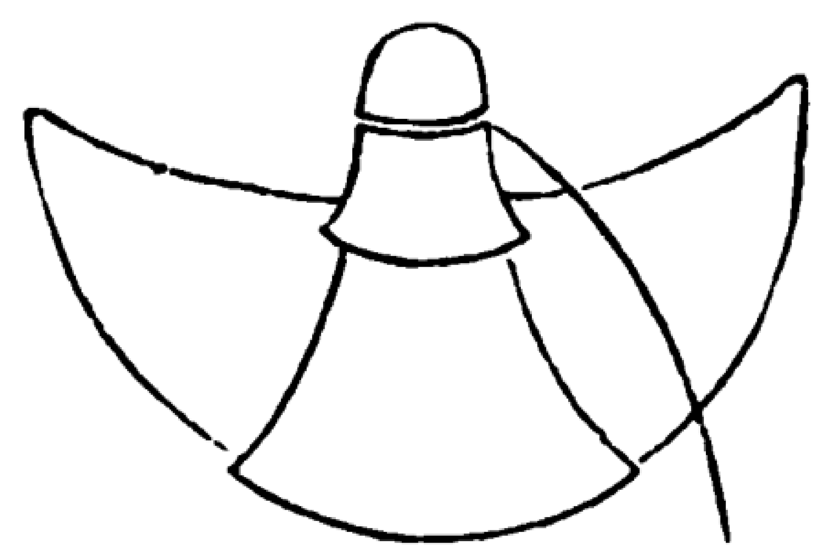
西山たい子

寶船

まづ、右の形に厚紙を切り、綿を入れ、切をはり、

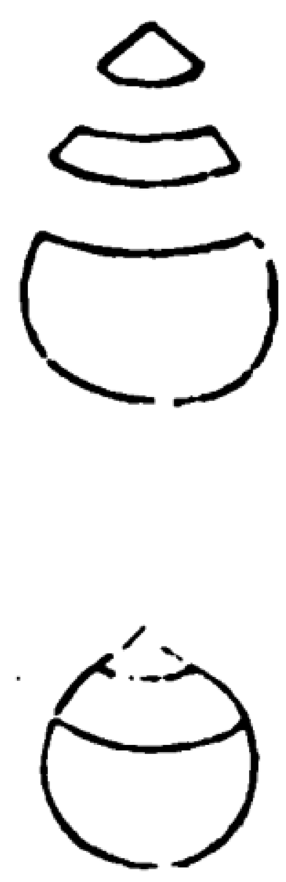


くみ合せて左の如き船の形をつくりおくべし。



中のすぢは、糸にてくゝりたるなり。

それより、萬づの寶を、小さくつくるなり。先づ寶珠の玉を左の如く切りて、くみ合すべし。

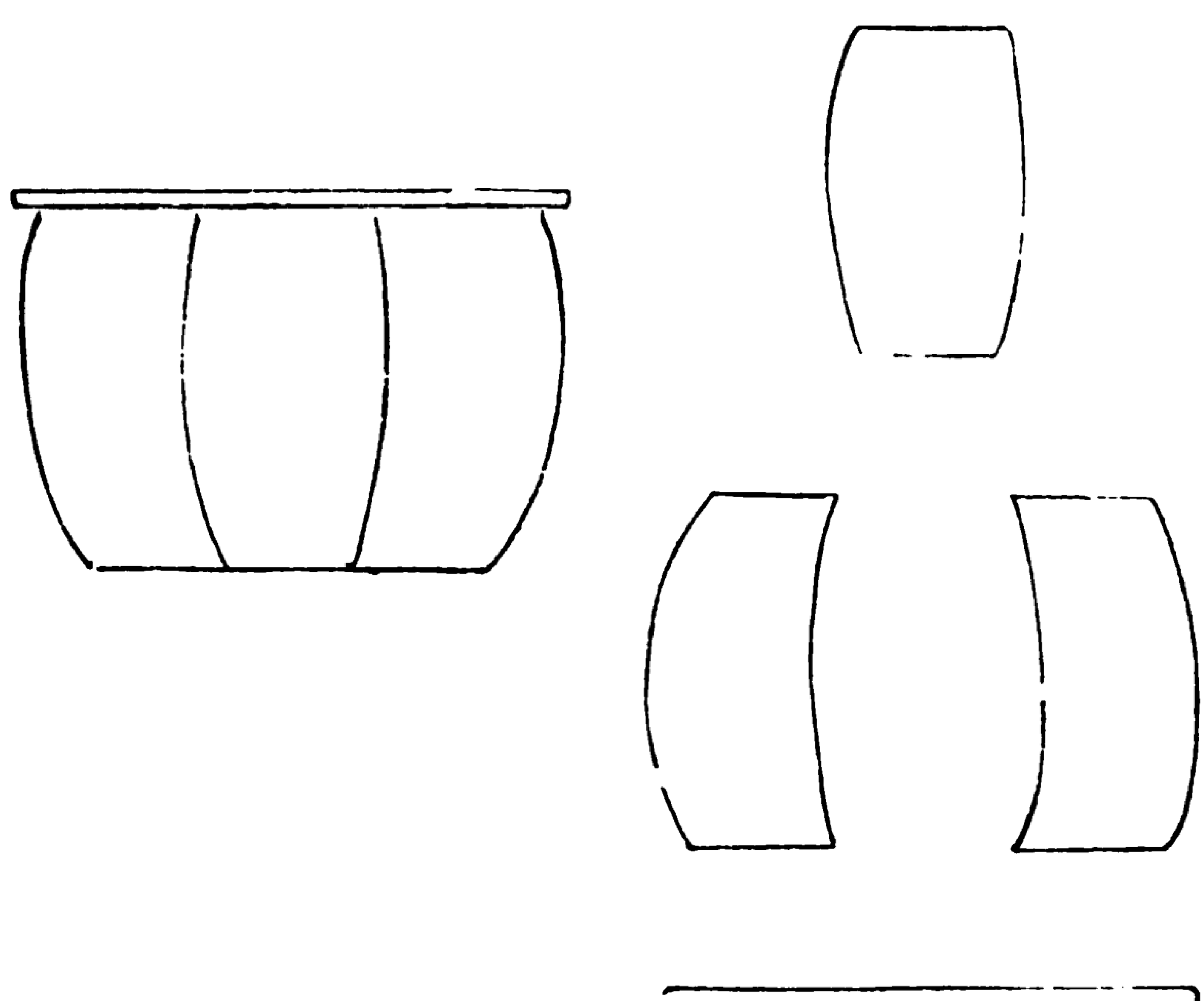


又、枝珊瑚珠、其の他よろづの形をつくるべし。

之は寶珠の玉の如くくみあはするなり。

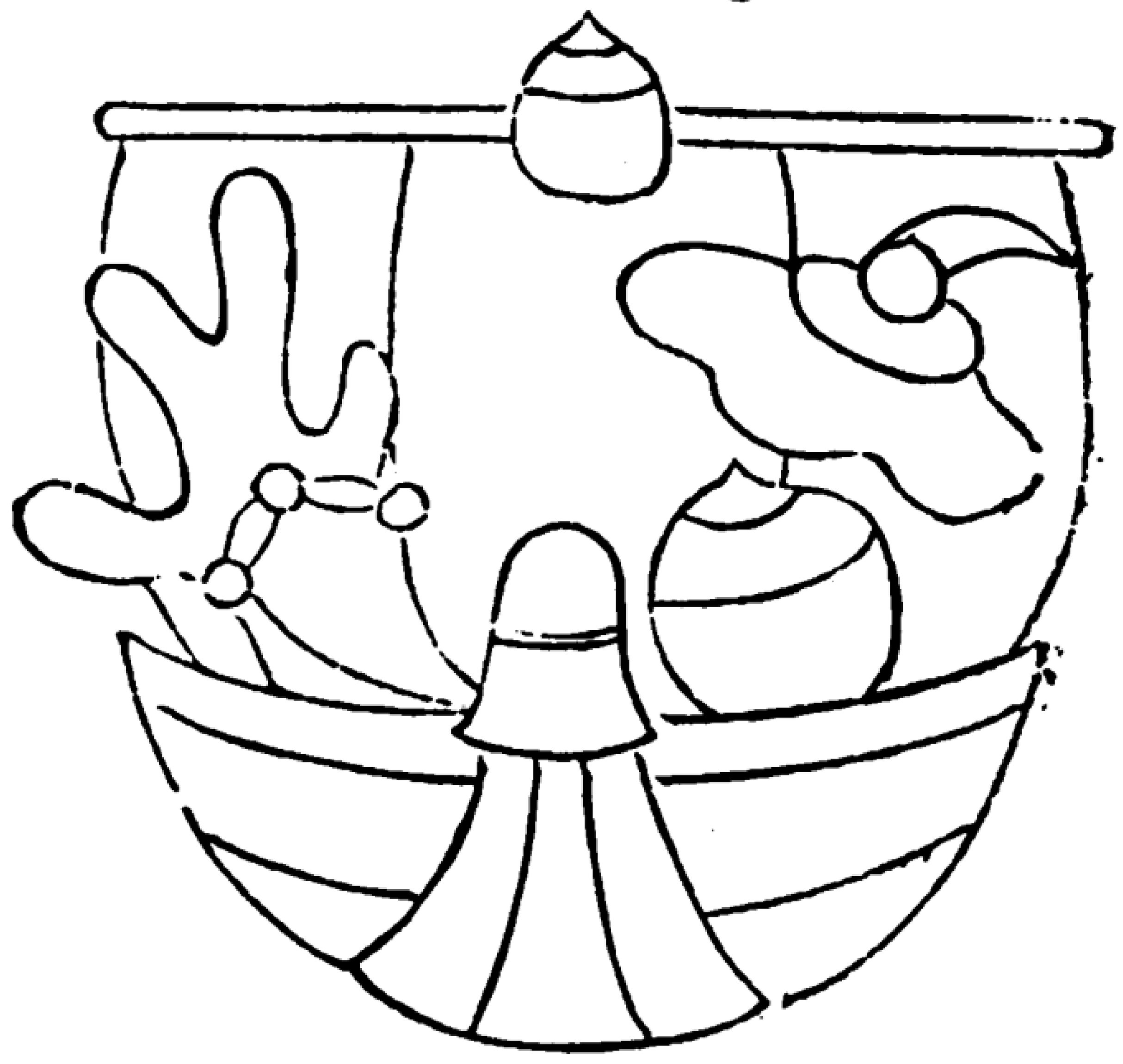


それより、帆前船の帆の如きものをつくるに左の如き形に切りてくみ合すべし。



之、前の船の形したるものとの間に萬づの寶をはさみ、又、はりつけて、寶船とするなり。左の圖を見て推し給へ。

その圖



色合は、よく見はからふべし。隨分わかくてよろしき細工物なり。

だいどころ

泡雪はんぺん吸物

何魚にても、新鮮き魚の、骨を去り、皮を剝ぎ、細かにたゝき、擂鉢にて、能く擂り、鷄卵の白身を多量いれ、食鹽と、味淋の、煮きりと、煮出しを加へ、よき程にゆるめ、又、能く擂りて、茶筌にて、泡たゝせ、沸騰ちたる、清し汁の中へ、金杓子にてすくひ入るべし。ふきの芽、獨活抔、取合せも宜し。

鰆の照燒

鰆を、能程にきり、醬油と、味淋の煮きりとを割りたる中に、肉を暫漬け置て、後、串にさして、燒べし。燒たる頃、又味噌と、醬油を煮つめたる汁をつけて、さつと炙るべし。

燒はぜ人參大根の煮浸し

大根人參の皮を剝ぎ、能程にきり、燒はぜと共に、鍋にいれ、能く湯煮して、和らかになりたる時、味淋、鰹節を加へ、醬油をさし、煮あがりたる處へ、胡椒、少し加ふるもよろし。

煎鳥

鴨、家鴨、鶏の類の毛を去り、毛焼をなし、能く洗ひ、骨を去り、肉を能程にきり、取合せは、筍、牛蒡、慈姑、獨活の類をゆでゝ、鳥肉を鍋にいれ、胡椒、少しをふり、手早くかきまはし、八分通り煮えたる時、皿にとり置き、鍋に、胡麻油をいれ、烟のたつを見て、前にゆで置たる野菜を投れ、能く煎りて、味淋と、醤油を投れ、少し煮たる處へ、鳥の肉をいれ、煮わぐるなり。

霞豆腐

豆腐を絞り、大根おろしをおろし、水を絞り、豆腐六分、大根おろし四分の割合にて、摺鉢にて、能く摺り交せ、沸騰湯にいるれど、よくよるものなり。それを、おみ杓子にてすくひ、椀に盛り、淺草海苔に煮かへし醤油にて用ゆ。

菜花園

○春の草木くさ〴〵

○柳　楊ともかく、語源は、彌長木の意かとも云ひ、また梁木の義ともいへり。又、古矢木に用たれど、矢之木の轉かともいへり。げに根はながくして、容易に倒るゝ事なし。俗に柳に風折れなしと云ふは、木質柔かにして、枝などの嵐にふき折られざるを云ふなり。此の木、甚だ生活の力強く、枝を折り取りて、少し水氣のある所に挿ゝば、必ず、根を生ずるなり。古弘計王民間に忍びてあらせらるゝをり、皇統にて在しませし事を告げたまはむとて、

いなむしろ川添ひ柳水行けば
なびきおしたち其の根は失せず

と詠ひ舞はれたり。
種類に、しだり柳 川柳(川そへ柳) 青柳 はこ柳 こぶ柳等あり。金絲 白綿 點花 弱艸 樹聖 門の柳 玉柳 風見草 風無草 根水草 めざり柳 柳の髪 柳でし 柳の眉 春すゝきなど云ふは、皆異名なり。

歌　萬葉
蛙なくむつたのよどの川やなぎ
　れもころみれさあかぬ君かも

仝　堀川百首
もかり船はつゝしめなはこゝろせよ
　河そひやなきかぜになみよる

十圍、又は、白尺といへるは、皆支那の柳の故事なり。

○芹 は根白艸 水英 苦蕲 女菜とも云ふ。

歌　新撰六帖
春さめのふり过へてゆく人よりは
　わがまつものはやせ川のせり

俳　[illegible]
摘よりはさろにひまさろ根芹かな

仝　其角
浮ぶ鵜芹梳るなかれかな

二月手入すべきくさ木 (二)

接換すべきもの
臘梅 海棠 繍毬 林檎 金縷梅 薔薇 木瓜

下種すべきもの
松子 杏子 胡桃 薏苡
諸の花子 皆下べし。

澆灌すべきもの
牡丹 芍薬 瑞香 林檎 杏 梅 桃 李 梨
凡て、草木花果とも、皆肥を澆ぐべし。

培壅すべきもの
石榴 梨 海棠 棗 林檎 梅桃 柿 栗
諸果木の枝條を修め剪るべし。凡て種植すべき地は、能く耕鋤して、糞尿を澆ぎ置くべし。



國文學講義

磯野徳文

（前回の續）

○爾來三千年の間、おのづから、盛衰はあれども、臣民の精神はかはらずして、皇統一系の天皇をあふぎまつること、なほ、天日を仰ぐが如し。爾來は、ジライとよむ。國語にては、ソレヨリコノカタともよむべし。其の昔より、今日までといふこゝろなり。三千年は、サンゼンネンとも、ミチトセともよむべし。間は、アヒダなり。神武天皇の御位につかせ給ひしより、

本年ハ、二千六百年にあたれり。この以前のこともあれば、大方に、三千年とは、いへるなるべし。おのづからは、俗に、自然にといふにひとし。誰がするとはなく、うつりゆくをいふなり。この次に、國にの二字を入れてきくべし。盛衰は、セイス井とよむ。盛とは、さかりなるをいふ。さかりとは、いよ〳〵さかえゆくをいへることばにて、繁昌のこゝろなり。おのれおもふに、サ(咲)ク、サカ(榮)ユ、サカ(盛)リなど、語のもとは、皆一つなるべしとおぼゆ。如何あらん。衰は、おとろふるなり。盛とは、うらはらなり。オツ(落)ルこゝろなるべし。臣民は、さきにいへり。精神は、セイシンとよむ。かはらずは、もとのまゝなるをいふ。皇統ハ、クワウトウとよむ。皇祖よりの御血統を申す。一系ハ、イッケイとよ

む。他よりつかへずして、一すじなるを申すなり、天皇は、さきにいへり。あふぎは、上方を向くをいふにて、こゝにては、うやまひあがむるこゝろなり。まつるは、敬語なり。ことばのこゝろは、後にいふべし。なほは、俗に、チヤウドといはんが如し。天日は、テンニチとも、テンジツともよむべし。天上の日輪、すなはち、太陽なり。仰ぐは、アフグなり。如しは、ゴトしにて、俗に、ヤウニアルといふにひとし。

○彼の海外萬國の、朝に君となり、夕に臣となりて、定めなきものにくらぶれば、豈、たゞ、天壤の差のみならんや。彼のとは、他をさして、アのといふに同じ。海外は、さきにいへり。萬國は、バンコクとよむ。地球上に、數多き國々をいふ。のの上に、にてといふことばを補ひて心得べし。朝は、アシタとよむ。アサなり。君はさきにいへり。夕は、ユフベとよむ。日の暮れがたをいふ。臣もさきにいへり。朝のほどに君となれるものも、夕には、はやく、他のものに位をとられて、臣となるといふ意なり。定なきは、サダメなきとよみて、常ならぬをいふ。くらぶればは、我が國のありさまと、彼の國々のありさまとを、比ぶれば、となり。豈は、アニとよむ。何として、又は、いかでといふこゝろにて、下のやと相應ずることばなり。たゞは、一つのみにて、他をまじへぬをいふ。天壤は、テンジヤウとよむ。天は、上方の天なり。壤は、ツチなり。物みづから生ずるつちをば、土といひ、人の、たがやして、物をうくるつちをば、壤といふなり。塊なきやはらかなるつちをさすなり。差は、サとよむ。タガフこゝろにて、齊しからぬをいふなり。のみは、其の物に限りて、

他には、及ばぬこゝろなり。ならんは、ニアランのつゞまれるにて、このンを、俗には、ウにいひて、ナラウ、又は、アラウといふ。やは、やはのこゝろにて、反語なり。いひかふれば、天と地とは、極めて差ふを、それにもまして差ふといふほどのこゝろにて、其の差の、いと甚しきをいへるなり。

漢文學講義

佐々木天遊

月瀬記勝四

齊藤拙堂

花月之賞已畢。還就宿。夜已過三更一。疲甚。一睡到レ曉。覺則奇寒沁レ骨。紙牕甚白。起推レ戸。見下雪積二平地一三四寸上。連呼奇。又呼酒。滿引大爵。已同人出。復赴二眞福一。到二昨夜翫レ月處一。雖二溪山不一レ異。丹崖碧巖。悉化爲二白玉堆一。花亦加二素彩一。如三粉傅二何郎之面一。其美更增。一俯一仰。八目皚然。獨溪光益碧。作縹玉色耳。梅溪之淸於是焉極矣。』古人論レ梅。謂レ讓二雪三分白一。然雪以レ白勝。梅以レ艶勝。各有佳趣。韓退之詠雪梅云。彩艶不二相目一。是可レ爲二定論一已。此行既收二花月之奇一。今又幷二雪梅之淸一。天之賜レ我何厚也。欲三往覽二前路之勝一以二歩履艱一而止』

花月の賞、已に畢り、還て宿に就く、夜、已に三更をすぐ、疲るゝこと甚し、一睡曉にいたる。覺れは、則ち、奇寒骨に沁し。紙牕、甚だ白し、起て戸を推せば、雪の平地に積む三四寸なるをみる。連りに奇と呼ぶ。又、酒を呼んで滿引大爵す。同人と出で、復、眞福に赴き、昨夜月を翫

ぶの處にいたる。溪山異らずと雖も、丹崖碧巖、悉く化して、白玉堆をなす。花、亦、素彩を加ふ。粉の何郎の面につくが如し。其の美、更にます。一俯一仰目に入りて、皚然たり。獨り、溪光益々碧にして、縹玉色をなすのみ。梅溪の淸、是に於て極れり。古人梅を論じて曰く、雪に三分の白を讓ると。然も、雪は、白を以て勝り、梅は艶を以て勝る、各々佳趣あり。韓退之雪梅を詠じて云ふ、彩艶相因らずと、是、定論となすべし。此の行、既に花月の奇を收む、今、又、雪梅の淸を併す、天の我に賜ふ、何ぞ厚きや。往て前路の勝をみむと欲す。歩履艱なるを以てやむ。

此の文は、拙堂先生月瀬記勝中の第四篇目であります。扨、花月の賞で、月夜に梅花をめで歡ふことが、已に終りて、十分に興を盡したものだから歸りてやどりに就きました。ところが、夜も大分に深けて、はや三更をすぎまして、今の十二時過頃にもなりました夜深くまで游興したものだから、大變に疲勞を覺えました。そこで、一睡到レ曉で、ひといきで、天明までねむりとうしました。ふと目を覺しましたところが、寒氣が、(奇寒は、ふしぎにつめたきこと)いつになく强くして、凛々と骨身にしみわたり、(沁レ骨は、骨にしむと也。)窓の障子紙が、大變に白くみゆるのであるから、さてはと思ふて、起出でゝ、部屋の戸を推明ました所が、睡りて覺えぬ間は降りたものとみえて、雪が、平地の上に、殆んど三四寸許も積りて、をりました。そこで、雪の明りで窻の紙障子も、いつもより白くみえたのである。かく、景色がなか〳〵に面白きものだから、連りに(連は、つゞけさまと云ふことなり。)これは、奇妙じ

や〳〵と、二聲三聲つゞけさまによびまして、又もや酒をもてこよと呼びよせて、盃に波々（滿引とは、盃いつぱいに酒をつぐことなり。）と酌みて、澤山に飲み盡して、大に醉ひまして、（釂は字書にも、飲レ酒盡也とありて、俗に云ふのみほすことなり。）興に乘じて、同行の人々と宿を出でゝ、雪中の梅を賞せんとて、復再び、眞福寺と云ふ寺まで赴きまして、昨夜花月を賞翫いたしました場所まで行きました、溪も山も、昨夜みました溪や山で、別段にちがつた溪や山やと云ふ釋にあらねども昨夜みし、丹き溪の崖やら、青き碧の岩石やらは、積雪に埋れて、一夜の中に、悉くのこらず、變化して、白玉の積み重りて、うづたかきが如くに昨夜みしとは、うつてかはりて、丹涯も碧巖もみし影もなく、悉く白玉を積みかさねた樣に、眞白になりて

をりまして、梅の花も、亦白き色へ素彩は、白き彩色と云ふことなり。）を加へまして、白きが上に、白くなり、譬へて申さば、昔時漢土に何晏と云ふて至りて顔の色の白き人がありまして、素顔でも、白粉をぬりたのかと、人が疑ひ思ふ程でありましたが。ちようど、其の何晏の、兼て白き顔面に白粉の傳いた樣に、梅の花のしたちが白ひのに、雪の白ひものが降積りたものだから、やがうへに白くなりて、其の奇麗なことか、更に一段と增して、唯みるよりも、一層うつくしく見えるのである。（何郎の郞は、男子の通稱なり。）（粉は、米の粉のことで今の白粉のことなり。古は、米の粉を面にぬりたもので、鉛を燒いて作ります樣になりたは、後世のことであります。）俯して、下をみ、仰いで、上をみ、どちらをみても、目に入りて、眼にみゆる限り

は、皚然(皚然は、形容詞て眞白き有様を云ふ。)と眞白くて、白皚々としてをる、其の白きものの中に、唯獨り、溪川の水の光のみは、青みきりて、兼て、水が清く碧りなるのに外は、皆積雪で眞白くなりてをるものだから、青きものが、一層めだちて、益々みどりにちようど青碧色の玉の色の樣に青みきりて、流れてをるばかりで、溪川の光より外に、青きものは、何にもない。(縹玉は、青色の玉のごと)耳は助字で、こゝでは、語決するの辭なり。)此の清淨の景色と云ふものは、誠に見事で、梅溪、即ち月瀨の清き風景はこれかとまりで、此の上に清淨皓潔の景色のありようはない。(於ㇾ是 焉の焉は助語極矣の矣は決辭なり。)(此の一段、文章中々に面白し。よく玩味して、其の妙を知るべし。雪中の梅雪中の崖巖雪中の溪光想像りても、其の清潔な景

色か眼前にちらつく程である。)さて古の人か、梅と雪とを比較して、梅花を論じて、其の白きことが雪に三分を讓りて、梅の方が、三分程負ると云ふたことがある。乍併どうも、一概に、そうばかりは申されぬ。成程雪は、白を以て梅に勝りかつけれども、梅は、亦艶のつやを以て、雪に勝りかちて、それ〴〵に梅は梅、雪は雪で、面白き趣味がありて、梅が負とも、雪か勝とも、雪か負とも、梅か勝とも云へぬ。どちらも優劣はないのである。夫の唐の代の韓退之と云ふ人が、雪と梅との詩を作りて、雪の色(彩は色なり)と、梅の艶とは、互に相より同じからず。雪は彩を稱し、梅は艶を稱し、兩なから面白ひと云ふたが、是か不ㇾ可ㇾ動の論で、中々どちをどうともいへぬ。(已は助字で、語終の辭なり。)韓退之春雪間ニ早梅一の詩に梅將ㇾ雪共ㇾ春 彩 艶

不二相因一云々とあり。)と古人より、此所までは、梅と雪とに付て、其の優劣を比較して、論じましたので、此が閑挿と云ふ文法であります。さて此の度の遊びはと、本題に立返りまして、少しく感慨の文字をなして申しまするには、誠に仕合なことゝは、此度の遊は、既にはやこれまでに花をみしのみならずして、併せて、月夜の花の奇景を収めて見、今は、又、其の上に雪中の梅の清潔なる景色までも加へ併せてみましたが、天の我等に賜ふて、幸を降さるゝことが何ぞ厚きやで、どうして、此の通りに重ね〳〵の仕合をめぐむでくだされるのであらうかと、重ね〳〵の面白き景色をみしことを天意に帰して感歎するので、個様な所か文章の波瀾と申す法であります。さて、雪裡の梅溪の景色が、誠に清浄にして面白きものでありますから、今少し

往きて、さきの方の路筋の勝れたる風光を見物したひと思ひましたけれども、どうも雪が澤山にふり積りて、をるものだから、歩み履み歩行いて往き進むことが難儀なものだから、殘念ながら、えゆかぬで、とゞまりましたと云ふが、此の文の文義でありますが、月瀬梅溪の雪景を寫して巧妙なることは、中々書も及ぬのであります。試みに、雪中の梅溪に游むで、此の文な誦讀しましたら嘸清絶を覚えて愉快であろう思ひますが、能々熟誦せられんことを希望します。



漫録



主従心得草（承前）

諏訪忠元

○父母の目をぬすみたる其の報ひ身の跡先も見へぬくらやみ

○千早ふる神も御存じない道をいつの間にかはよく覚えたり

此の歌は、ねばけ先生の見聞草に出たり。何の覚えずともよき事を、よく覚え、ればえねばならぬ事は、さつはり覚えぬ愚邪の悪人共にはてまる。歌に「あしき事聞耳はやしよき事はきかぬつんばとなるぞかなしき」と此の歌の通りに違ひなし。

よき事は見もせず、聞もせず、寄付もせぬ悪敷事は、よく覚えて、直に行ふ。誠にこまり果たる凡夫共なり。世の中は安心に暮せぬ筈としるべし。人の本心は、至極清浄なる物なれ共、色と欲との、二つより無理か出来て、本心の鏡がくもるなり。此の二つを取りてのけると、身心共に、清浄にして、大安心の世界となる。

○身の科は其の品々にかはれども色と欲とを根本にして

○世の中にのがれて見事なる物は色と欲との二つなりけり

此の二首の歌をよく考へて、色と欲とは悪事の根本にして、恐るべきの甚敷なり。此の二つは是非共になきやうにすべし。此の二つにはなれたる人は、身心清浄六根清浄にして、此程の安心福徳はあるべからず。是を大智聖人といふ。皆々是の

事をしつて、人のものを決してほしかるべからず。むさぼらざるを以つて寶とし。善をするを以て寶とすべし。是を誠の福人といふ。其の道を謀て、其の利を量らずといふ、大智上々の君子なり。何卒、色と欲との二つを愼んで、一生安心にくらすべし。

天保三辰年七月、ある裏店の前を通りしに、內儀達、四五人寄合ひて、あるとあらゆる誹咄をする。一人の女房がいふには、おまへのおとなりの娘も、モウ廿七八でもござりませうに、今に嫁入口のないは、ろくろ首でもござりますかといへば、大方、其のくらいの事さといへば、二度目のはなしには、ろくろ首じやげなどいふになる。何サろくろ首でも何でもない、器量のよい娘なり。此のむすめは、堅い女故に、下手な所へ、よめいりしてはならぬ。二度三度よめいりしては濟ぬといふ心なれば、たとひ孀でくらすとも、夫にはかまはぬ。實體な男の所でなくては行ぬと見合せて居のじや。外の女のやうに、男が少々頼むと、直にかむりを竪にふる女にあらず。實體な男でなくては相談せぬといふ貞女なり。夫故によめいりを見合せて居るのじや。爾るをろくろ首にしてしまつた上樣達の惡口にもこまる。又、一人の女房がいふには、大屋の上樣も顔は美しけれども、口は剃刀でござりますといへば、かみそり所ではない、出刄庖丁でござります。そして、朝はいつ迄もおよつて居て、おまんまにさいでのみして、毎日毎日おつくりにかゝつてござる。又きつい御器量自慢〴〵でていしゆ樣が、御心よしじやから、お仕合せじやと〳〵齒より外へ出した事は引こまされぬ者なれば、一言半句も恐れ愼むべし。歌に〇千早振上樣が寄合て人のうわさをす

くも世の中

諸國孝義錄（山城國）

孝行者清七

清七は、京都新町通下長者町を下る元頂妙寺町の借屋にすめり。をさな名を駒吉といふ。九歳の時、母のつるといふもの、これをつれて、赤尾屋清七に嫁ぎしより、繼父實母によくつかへしが、繼父、病に臥して、世わたるわざもなしかたければ、幼き身にて、晝夜となく介抱し、醫者をたのみ、服藥させさせ、いさゝかなる商をなせども、繼父の好める物はもとめてすゝめ、病のいえん事を、佛神にいのり、さま〴〵に心をつくしけり。天明八年、大火の時も、繼父をたすけて、わざはひをさけ、親しきものを賴みて、借宅せしが、かゝる者なれば、人々のあはれみをうけ、野菜などあきなひて、やう〳〵に世をわたれり。繼父は、寛政元年七月、病重り、今はのきはに、駒吉が年若き身に、心を盡して、養ひくれしことは、言葉にものべがたしといひて、うせけるとぞ。其の後名を清七とあらため、寒暑をいとはず、晝夜をわかず、己が、業をはげみ、母と弟を養ひ、すきはひあしき時にも、母にはつゝみて、よきさまにいひなし、いさゝかも、商の利あればとて告て悅ばしめ、外にて珍しき品、又は、味よき物をみれば、かならず持かへりて、是をすゝめ、世のつねの行義正しくて、奢かましき事なく、暇あれば、謠をうたひ、かりにも小歌淨瑠璃などいふいやしきふしをば、口ずさむ事なし。母には、佛にまうづる事のみをすゝめ、弟には、親につかふるわざを敎へければ、同三年井上美濃守、菅沼下野守町奉

行たりし時、聞えあげしに、その五月御褒美ありて、銀、そこはくたまはりけり。

奇特者庄兵衛

庄兵衛は、京都新町通二條を下る町の年寄なり。家名を山形屋といふ寛保元年三月十一日の夜、庄兵衛が住る地の堺なる、二條通にて、新町を、東へ入町、升屋長右衛門の家より、火おこりけるに、庄兵衛、おのが家をもかへりみず、町のうちをかけめぐりて、火事あり、とく水くみたゝへよといふ。やがて、火消の者、はせ來れる水の手よろしければ、忽にうちけしぬ。しかしながら、これ庄兵衛の力のいたす所なりとて、町のうちの者、相はかりて、銀三枚を贈れるに、庄兵衛、いへらく、かゝる事は年寄役のものゝ勤むべきわざなり。此度謝禮をもうけたらば、もし、又、手あやまちなどあらん時、かれは謝禮をうけんが爲に、かゝることをせしなどきこえんには、後の年寄役のものゝ、遠慮して、やむべきもはかりがたし、末々のため、よろしからずとて、つひに、その謝禮をうけざりしとぞ。又、同じ町に住る升屋長右衛門のかゝへをける、屋敷四軒のうち、二軒を百足屋徳兵衛といふもの、買得て、手形などあらためしが、すべて、家一軒につきて、何程といへる役のさだめあれば、二軒のおもて口をはかりしに、一尺八寸たらずとて、とかくいひしを庄兵衛があつかひにて、事故なくすみしかば、長右衛門より、肴を贈れるをもうけず、同じ年庄兵衛、年寄役かはるべき時節になりぬれど、今三年かはらでつとめよかしと町のうちの者こぞりていひけるに、さき〳〵の定なれば、銀三枚を贈りぬるに、年久しく雇ける番の者、その比火にあひければ、是をとらせて、假屋作らせけり。かゝる奇特の者

なればとて、同二年馬場讃岐守三井下總守、町奉行なりし時、鳥目そこはくあたへて賞せり。

辨似抄（承前）

赤松景福

うらびれ　うらぶれ

古今四　秋萩にうらひれをれは足引の山下とよみ鹿の鳴らむ

此はうらびれとあり。榮雅抄に、うらびれうらぶれ同じといへり。己按ずるに、びぶ通へるよりいふなるべし。たとへば、さびしと云ふ詞を、古くは、さぶしといへるが多かり。猶次に云ふべし。

萬葉五　人皆のうらふれをるに立田山御馬近かはわすらしなむか

此は、本集に宇良夫禮遠留爾とあり。此かき樣、集中三四見えたり。又、浦觸とかけるもの、浦經とかけるもの、併せて十餘あり。いづれもうらぶれと訓むべき樣にて、宇良備禮とやうにかけるは、見えざるが如し。是によりて、古今集の例はさる事ながら、猶古く多き方よかるべし。

泉川

萬葉一長歌　文負へるあやしき龜もあたら世といづみの川に、

新古今　時わかす波さへ色にいづみ川柞の森にあらし吹らし

此等は、いづみを出に言掛けたり。

新古今　みかの原湧て流るゝいづみ川いつみきとてか戀しかるらむ

新續古今　いづみ川いつより人の住絶て久仁の都は荒そめにけり

此等はいづみをいつ(何時)に續けたる也。元の地名は、いづみと濁音にいふを、かやうにいつと清音にもいひなせるなり。六帖に忘らるゝ時しなければ春日野のとぶひありやと待ぞわびしきとよめるも、飛火を問日にいひなせるにて、清濁を通用せり。又周防内侍が隱れどもかひなきものは諸共にみすの葵の枯葉なりけりとよめるは、御簾といふ清音を不見といふ濁音の詞の意にいへるなり。かやうの事は、おのが筆海餘滴にいへり。こゝには、其の一斑を志るしつ。

こゝのへ　こゝのかさね

千歳集　こゝのへにさけるを見れば藤の花こき紫の雲そ立ける

源氏榊　こゝのへに霧や隔つる雲の上の月をはるかに思やる哉

此の語は、元漢語の、九重城闕、或は九重門などいへるより、譯せるなるべし、こはよろし。

古今十九長歌　れもはえすこゝのかさねの中にては嵐の風もきかざりき、

こも語の元は同じけれど、譯語の上にては、かくいふこと叶はず、古今集に見えたるものなれど、常の如く、こゝのへとよむべきなり。又正治百首に、なつかしき妻もこもれり、同じくはこゝのえにてや菫つまゝしとあるは、此所の江にて、又別なり。

大和めぐり

井上頼文

十一月一日午前　本科四年生　阿知和安彦

千早振神代は曰はず。神武天皇、橿原に都を遷

し給ひしより此の方、奈良の朝に至る迄、凡て五十餘代、其の中十餘代の天皇の外は、皆此の大和の國にましまして、天の下志ろし召しき。されば、代々の宮所の跡、御陵、其の頃の神社、堂宇、さては花紅葉をめでし岡、月をあはれみ、蛙をきゝし河、たゝなはる青垣山の內に、今尙殘りて、いと多かり。石の上ふるき昔を忍ぶどちの、一度尋ねたらむには、物學びするにこよなき助を得る事多からむかし。(監督教師評、趣首體を得たり。)いでや、其の由聞え上げて、許得てむと、是彼謀りしに、やがて事成りぬ。出立の日は、十一月一日と定められぬ。さるべきたづきもがなと、二日三日前より、其のかたの書ひもとく。橿原の御陵は、まづまぼろしに見えぬ。奈良の大佛は、早くも胸のあたりに畫かれぬ。と行きても、かくありかむなど考ふるは、彼の滿州の地圖を開きて、千々に思ひをめぐらす、

參謀官にも似たりな。誠や我が征淸軍は、既に阿利奈禮を渡り、九連、鳳凰のあだを破り、今は將に長驅して、奉天に打ち入らむとすと聞けり。此處にすら寒さ漸々加はりて、朝夕の風、いと身にしむを、昨日けふ韓山おろし、如何ならむ。名高き滿州の深雪をけちらして、雄たけびすらむ、我がものゝふあはれ、折からの、此の旅行、まさに目を樂しましめ、心を慰むる爲ならむやは。行程は往復八十餘里なり。七寸の草鞋を以て、よく八日の旅路をつゞけざまにたゆまずありき得なば、我も亦帝國の國民軍たる器量は持てりといひつべし。靈しき金鵄に大稜威あらはし給ひし、神日本磐余彥の尊の御跡を尋ねては、萬世の基建て給ひし、其のかみの御狀を伺ひ、一天萬乘の大君を、笠置の山に苦しめ奉りし、北條、足利らが無禮の影を、まのあたり、木津川の水に寫し見て、亂臣

賊子の罪を、七世の末まで鳴らしなば、誰かは此の旅行を無益なりと咎めむ。(評、貴重く、任大なり)定めの日來ぬれば、皆、とくより起きてさはぐ。一行は、三橋教授、弱げに見參らすれど、なかなか強き方ならむ。井上教授は、常に足とくありき給ふ。此度の遠征にも、例の如くありかれなば、あだし人の涙の種なるべし。宮島教授、三橋教授と同じ狀におはすらむ。山本助教授、御顏、いと得意なり。小指かゞむべき人ならむかし。さて生徒には、大塚、高松の二子は鳥にもたとへつ可きか。裝も、いと輕げなり。福舍、中村の二子は次なるべし。館、森、宗村、松本の四子は、其の次か。石川子、いとつよげに見ゆれど。山川、宇仁、安藤、近藤、澤田の諸子は、最勞る可き相ありなど、行く先の有様思ひめぐらす。是等の人々が、或は先立ち、或は後れ、或は勞れ、或は泣く、取り取りの狀は、其の日、〳〵の、日記に物せらるべし。果して、我が品評に當るや否や。(評高材疾足の者果して誰ぞ)

五時頃出で立つ。空は暗けれど、鳥の聲こゝかしこに聞えぬ。七聲、八聲を續くるは、明方に近ければにや。山田の町は、まだ起きたる家なし。夢に、尾の上の鐘やきくらむなど歌ひつゝ行く。曉の霜、いと白し。道々の語草は、皆征清軍の上なるに、彼の萬葉なる防人の歌は、此の頃、いづれの口にも誦せられたるぞ勇しき。足とき者は、外宮に詣でゝゆく。後れたるは、遙に拜みて行く。宮川を渡る頃、空や。白うなりて、星のかげ西の空に五つ四つ。いつしか、二つ一つ。川霧いみしうたちこめて、さゝらき流るゝ水心地よし。霜白う置けるを見て、

　橋の上をこゆる波かと思ふ迄おく霜白し度會の川。

千鳥かまびすしくさわげり。

通ふ人たえにしあとに村千鳥いくたび橋をなきわたりけむ。小俣の停車場に至る。先なる者はほこらしげに待てり。後ればせに來る者顏の色、いと青し。くやしければにや。はた寒きにや。やがて驛夫がならす鈴におどろかされて急ぎ乘るは、まだ初旅のわかうど共なり。かうやうの折は、然あはてぬ者ぞと翁ぶりてやをら乘る車は西の方さして馳せに馳す。窓洩る風に、おのづから頸縮めらる。夫さへあるに、例のガタビシヤ滊車左右にゆられ、頭ども一所にまろびあふ。白馬見むとて、中の御門の戶じきみひき入れし牛車もおもひ出さる。折から左の山の端、いと赤うなりて、日影おもしろうさし登れり。日出山と曰ふ題にて

日やいづる山やにげつる二つながら動かぬ者と

かねて聞きしをと口ずさむを人々笑ふ。とかくして、早、田丸を過ぎ、相可に至る。農夫が曳く牛のあかうめもせで、わが車を守り居るを見て

おのが足のにぶきをうしと荒小田をかへす〲も恨みかはなる。松坂の停車場にて、山室山神社を遙に拜む。いにし年の春、吉野へ遊く路、おなじくこゝにて

吉野へと道は急げど山室に見捨てもかたき山さくら花

と詠じて、人にことつけて神前にさゝげしが、今年もとて、一つうめき出しつ。

天つ日に匂ひし花の。美しく咲きしはいつか。
美しくさきにし花の。天つ日に香ひしはいつ。
今の世はひらけにたれど。外國ゆ吹きこし風に。
人皆の心の花は。朝庭に散りと散りしき。夕庭にふりとふりしき。實もあらず匂ひさへなき。
言の葉の大和島根に。しげりあひつゝ。

六軒に至りて、車より下る。大和へは、こゝより西南の方さして行くなり。今日西風、いみじう吹

く。かざかみをながむれば、布引の山、げに布をしきたらむ様にそびえたり。西へ向ひて行くは、いと苦し。片野、小山など曰ふ村を過ぎ、小松生ひたる芝生にて、しばし息ふ。腰なる飯は、こゝにて腹の中にをさめられぬ。茶もなく、火もなし。餘りの寒さに、顔は紫色をなし、手ははじかみの如く、目よりなみだはら〳〵と落す人さへあり。かれいひの上になど思ふに興あり。やがて、八太村に至る。萬葉集に、八太の横山と有るは、こゝなるべし。八太は、和名抄、一志郡、八太（鉢多）とあり。昔秦人を置かれしより名けたることしるし。横山は、夫とわかねど、村より少し出づれば道のべに、雲出川の上流あり。山をいだきて流る。湯津石村ありて、水のたぎち流るゝ音、なるかみの如し。或人は、阿保山のふもと、垣内なりといへど、己はこのあたり思ひ合せられぬ。式内、八太神社といふは、村の西北の方にあり。埴安姫の神を祭れり。拜みてゆく。次は田尻と曰ふ村なり。田舎には珍しき里にて、旅籠屋などいらかを並べたり。

此の頃、漸々足つかれぬるを、かくてはめいぼくなしと忍びて行く。

忍ぶれど姿に見えぬわが足を豆や出來しと人の問ふまで。

山のたゞずまひ、水の流、廣き松原など、見るに諸越の空おもひやられ、例よりは、様かはりて、めづらかなり。彼の工兵が、夜の間に橋かけたりと聞く、船橋里、こゝをたのみとあだ共が、力の限りふせぎし牡丹臺、さては鴨綠江、牙山の軍營、赤十字旗のたなびくわたり、凡て新聞の畫報にて見しに通へる所々は、敵かしこに有らば、いかゞ。伏兵、こゝより起らば、いかゞなどやうなき空想、胸のあたり去らず。折々は、足

の痛さも忘れてすぐる時ありけり。正午、大村と曰ふ所に至り、とある茶店に入りて、再息ふ。あたゝかき茶など飲むに、甘露々々と叫ぶ。さるにても、わが征清軍は、かゝる事だに能はざるべきを。（評若句力あり）

○頼文云く。本文に五時頃出で立つ、明治二十八年十一月一日、午前五時、三重縣、度會郡、宇治、山田町、大字、浦田町なる　神宮皇學館の生徒寮を發せしなり。

山田の町はまだ起きたる家なし云々、こゝに山田の町といへるは大字、岡本町、豊川町の邊をさせり。

おく霜白し度會の川　度會川は、宮川の一名なり。もとは船渡にて、　神宮御遷宮の時のみ、船橋をかけたりしが、維新の後、今の如く假橋を架けらるゝ事になりきと。

萬葉集に

度會大河邊若歴木　吾久在者妹戀鴨　人麿

山室山神社　贈正四位本居宣長翁を祭る。明治八年社殿を建設して、山室山神社と稱す。十三年七月、勅使參向して幣帛を賜ふ。

布引山　一志郡にあり。

鴨長明伊勢記

嵐ふく雲のはたてのぬきをうすみ　むらきえわたる布引の山

八太の横山　湯津石村

萬葉集に　明日香清御原宮御宇天皇代

十市皇女參ニ赴於伊勢神宮一時見ニ波多横山巖一吹黄刀自作歌

河上乃　湯都磐村二　草武左受　常丹毛冀名　常處女煮手

本居宣長翁の菅笠日記
大のき川、大きなる川なり。雲出川のかはかみとぞいふ。此の川のあなたも、猶、同じ里にて、家ども立なみたり。さて、川邊をのぼりゆく、あたりのけしき、いとよし。大きなる巖ども、山にも、道のほとりにも、川の中にも、いと多くて、ところ〴〵に、岩淵なんどのあるを見くだしたる。いとおそろし。かの吹黄刀自がよめりし、波多の横山の、いはほといふは、此のわたりならんと、縣居の大人のいはれしは、實にさもあらんかし。鈴鹿にもかのあと〻てあんなるをはやくいつはりなりけり。

五串の瀧 （歸省日誌中の一折）

佐藤赤川

已、はやくより、他に出て〻、未親しく、故山の勝地舊蹟をさぐることを得ず。故をもて、人に問はる〻毎に所謂燈臺もとくらくして、充分に答ふる能はざるを、常に遺憾となりたき。恰、よし、去年の夏鄉里みちのくに歸省することを得たりしか、折を得て、平泉地方にものしけり。其の途次ある、知人の案内にて、五串の瀧に立ち寄りけり。こは、その折の日誌中の一折なるが、古來名高き歌枕にしあれば、諸孃たちの歌よみ、文か〻む爲の參考にもとて左に抄錄すること〻はなしつ。

五串瀧、また玉瀧と稱し、陸中の關の西數里の所にありて、嚴美村に屬す。道路平坦にして、車馬の通行に便なり。瀧は源を酢川岳に發したる磐井川の中流にて、高しとにはあらねど幅凡、十數間あり。十數丁の間は、兩岸の奇石重疊として、恰、峻壑の如き奇觀を呈し、其の間、自、大瀧小瀧の別をなし、その下雲霞の如き飛橋をへだて〻、

小松瀧と稱するものあり。また、嚴美瀧の碑あり。撰文は、松崎慊道にして、題額は、白川樂翁公なり、己、先づ案内に從ひ、小松瀧の右岸なる觀樓に上りて、その勝景を賞嘆したりしが、瀧とは云ひ、水波、至て隱にじして、まはりいと廣く、名にしれふ磐井の清水滿々滯りて、淵をなし、岸べの翠松水面に映じて、綠は、いよ〱、綠を深め、清はいよ〱清く、れのも〱異様なるいはほのつき出でゝ、一層の奇を添へたり。中に就きて、鉢の如くえぐれたる石の水上にあらはれたるが、水をたゝへてありけり。これなん炎暑の旱天にもかるゝ事なしといひける。あまりの絶勝に、しばし時のうつるを知らず。既にして、樓を下り、橋邊にいで、再、橋下を顧み、また橋上を見やれど、白雪の落下するが如き奔流の怪岩に激して、その音のすさまじさ。その流のはやき等は奔馬の狂せるに似たりかし。無數の老松いはかねに茂生して羅列したるは、松島の勝を兼ねたりとやいはん。されは、日本四景の一ともせまほしとて

日の本の四のけしきにとりそへて
　かぞへまほしきいつくしのたき

なは辛くしてひねり出だせるうた、

水の音の高さその名をきゝてこそ
　たつねはきつれいつくしのたき

千五百岩なみたちこむるその間をば
　ながれも行くか五串のたき

たきのへにふるとし見ふる白雪は
　つもりもあへずながれ去にけり

思ふことなき身に見ばや五串の
　たきのながれにこゝろすまして

更に歩を進めて、大瀧の邊に出でたり。鏡の如くいとなめらかなるを、匍匐しつゝ、おそる〱の

ぞき見れば、おちたぎつ水の流のおどろ〳〵しく、そりたてる岩間に激して、更に一種の響をなして、あだかも山の崩るゝが如く、あるはさけなんとするが如し。その恐しさげにたとしへなしや。なほ聞く所によれば、昔藤氏の隆盛をきはめ、驕奢を事としたりし時の遊宴地の一なりといふ。さればそゞろにそのかみの事思ひやられてかくなむ

　ときめきていつくしがりし五串の
　　たきの流にむかしをぞ思ふ

この地、外に櫻樹數百本あり。一種異様なるものにて、春のあした、花さく頃は、近郷の老弱、杖を曳くもの、ことに多しといふ。（以下省く）

亡き友につきて（前承）

葛の舎主人

又の年、夏季休業に、また赤間關へ行くとて、君を音づれしが、こたびは君うつりて、萬松院といふに在り。萬松院といふは、黄檗宗の管長たりし、故釋霖龍師の別坊にして、今は、その門弟たる、山本提山師、これを住持せらる。院は高く山腹に在りて、北に向ひ、絶えず涼風吹き來りて、夏向は、暑さを知らず。殊に人家を遠く離れたれば、おのづから幽邃にして、仙境に遊ぶ心地せらる。住持は年の頃三十五六ばかり、心立すなほに、まめやかなる僧にて、何くれとなく、君と共にして、いと隔てなく物したまふなめり。折ふし、夏の事なりければ、いざ、夕げたうべんとて、臺所に至れば、一つの鉢には、谷川の清き流れを汲みて素麵をうかべ、一つには、南瓜を堆く盛り、また、鍋には味噌汁を入れたり。かくて食ふに、さながら塵界を解脱したるの味ありて、心を洗ふ

の感ぜらる。君、此處にては、これ等をこそてよなきもてなしとはいふべきなれ。町を去ると遠ければ、何物もしばしの間にはかなへがたし。されば、不便かぎりなけれど、今は住馴れて、何とも思へらず。この飯は、和尚とわれと二人して搗きしものなり。この素麺は、此の寺の檀家より奉りしものなり。また、この南瓜は、おのれが生徒の家より貰ひ受けしものなり。かゝる事常なれば、食物には、多く事かゝずなどかたるほどに、味一入旨きを覺えたり。さて、夕げも終へければ、皆皆廣間に打ちつどひ、涼しき風に吹かれ、蚊の聲をも聞かで、あるは謠ひ、或は吟じ、或は語りなどして、夜いたくふけぬるまゝに、蚊帳に入りて、東方の白むをも覺えざりき。かくて暇を告げて、赤間關に至りけるに、君、また音づれ來りて、こたびは、自から教導團に在りける頃、習ひし軍歌の未だ覺えつるを樂譜に上せてんや、と乞ひければ、おのれの知れる小學校に至り、その風琴を借りて、合はせ與へけるほどに、君、いたく喜びて、これに、自から作れる歌を載せて、やがて書肆を語らひて、版本となしゝかど、間もなく上京しければ、源涸れて、遠く流れ渡らざりしこそ、君の爲めに、かへすがへすも悲しく思ふなれ。

國學につきて　こは、君がとくより好みしものにて、果ては、これを究むるをもて、終生の勤となすに至れり。父君は國語の教師にてはありつれど、そのかみは、いまだ國學の幼稚なる時にてもあり、且つ、人能く、其の子を教へがたしといふ古語さへもあるにまして、父君はいとも嚴格なるさがなりければ、蘊奥の理義と、懇篤の教授とは、望みても得べからざりき。たゞ、折々父君のもちたまひし、語彙別記、詞の八衢、古今集遠鏡な

どを窺み見て、獨學せしものなり。かの「ふめばをしふまねば、行かむ方もなし心づくしの山櫻かな」「行きくれてこの下かげに宿かれば花やこよひのあるじなるらん」「折とらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりてちるまでは見ん」などの歌は、そのかみ君がいたく賞吟して、いまだ和歌の心をも知らざりしわれ等にむかひ、ねもごろにときわかして、手帳に書き止めしめしものなり。一とせの夏季休業に、おのが山口のまなびやにて習ひし文典の筆記を貸しくれよとて、持ち歸り、數十葉もありつらんを、一日の間に皆うつしとり、やがて、朱書もてこまぐ\と注釋をほどこしたりき。もとより、いそしみの心厚きが上に、まして、此の道に於ける志は、極めて堅く、姫路の分營に在りし時も、餘りの金あれば、直ちに行きて和書を購ひ歸り、調練の暇毎に、これを讀むをたのしみとせしよし語りき。住吉神社の書物といふは、大きなる書庫に溢るゝばかり藏めありて、そが中には、世に、稀なるものも數多あるを、見盡したりといへば、さばかりの力おもひやらるべきを、今又、都に上りて、なほ、そのおくがを究むといふなれど、間もなく錦を衣て、鄕に歸り來るならんと待ちつるに、いたましや、經帷子を身にまとひて、待つ人もなきよみぢに背き行きけんとは。

おのれ、すでに、君と、二つなき友として相語らへり。ことに、その鄕を同じくするをもて、その交り、一段の深さを加へたり。夏冬二季の休業にあたりて、おの〳〵歸省すれば、早きもの、必ず先づ、一方の家を訪ひて、未だ歸らざるや否やと問ふを例とせり。かくて、遇へば、その二三日がほどは、たえず行かひ、寢食をもわすれて、打ち

語らへりき。その音容、余尙は目前に見聞する心地して、たくましき體格のむなしくなりしとは、夢にはあらぬかとおもふばかりなり。あはれ、この友としも、今しばし、長く語らはんには、定めしくさぐ〳〵のかたりつとふべき事のあまたあるべかりしを。今はこればかりなることそうたてけれ。

（完）

見あたり次第

高雄の松

それ〳〵用事も終へければ、また〳〵面白事聞むと、かの翁のいほりをおとなへば、翁、まとをあるかぎりあけひろげて、きよらなるまがき越しに、遠山の景色などうちながめつゝありけり。余のあらはれたるを見て、此に來たるべし

と云ひさして、又も外方をながめつゝ、あゝ、春。またも春になつたものゝ。あゝ春の事でもいはふ

春由來　漢書律暦志には、春は蠢なり。蠢とは物の動き生ずる貌なり。御國にては、齋部正通の說に、春は發るなり。草木芽發なり云々。月令に天地、和同し、草木萌動といへるも同じ心なり。萬葉集第九

山城の久世の　代　より
はろは〻りつ〻秋はちりけり

此をもて考ふれば、芽のはると云ふ說は、此よりいでたるなるらむ。惣じて本朝の古言古訓と申すものは、此の萬葉、また古事記、日本記にてあきらかである。

或說に、春は晴なりとあり。そらの麗に晴れ〳〵とする故である。之も面白いすてがたき說である。

春の異名は、澤山あるが。其の內老人が記臆してあるものばかりも、之ほどである。

太皡　青帝　青皇　東君　勾芒　蒼天　青陽　陽和　花蓋　迎陽　韶光

○太皡とは、唐土伏羲帝のことにて、木德の君たるゆゑ、かの國昔より、世々に、日本の年德神を祭るがごとく、春の初に祀るのであるが、禮記月令に、太皡伏羲木德君云云とある。

○青帝は春神なりと、楚辭に見えて居る。

○青皇も、春の神で、青皇恩澤無ニ窮限一なと、詩に作られてある。

○東君は郊祀志曰。晉巫祀ニ東君一顏師古曰。東君は、日の神なり。

○勾芒は、少皡氏の子重といふを、木神とし。春の神とするが太皡と合せ祭る。

○蒼天とは、氣の初めて發して、色蒼々たるをもつて稱へます。

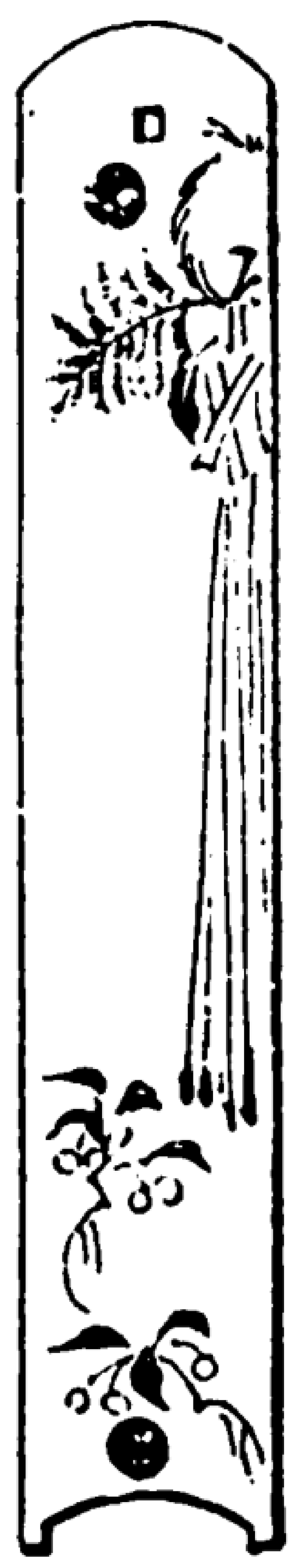
○青陽は天地の盛德、春は木に有り、木色青きをもて、青陽と云んです。

○陽和とは、白居易が詩に、先遣ニ陽和一報ニ消息一と有るよりいへり。

○花蓋とは、夏侯湛が賦に、春可レ樂兮綴ニ雜花一以爲レ蓋といふより云んです。

○迎陽とは、立春をいふのであります。

○韶光とは、韶は美也云々、春の景色のうるはしきをいへり。猶、漢書律曆志に媚景、或は韶景ともおなじと聞た樣でした。



樂園

おまゝごと

唐扇

東京では見ないが、余が地方の小兒等は、能く爲る事だ。庭に遊んで居た近隣の小兒等五六人、おまゝごとしませうとの、女の兒の發意で、われもわれもと男の兒まで加はり、日當りよき軒下に莚を敷いて、互に思ひ〳〵の玩具を運び、草花草葉を摘み集め、マッチの箱もて竈を造り損椀を鍋にかくれば、松葉を袂に拾ふもあり、庖丁に俎板は玩具の劍に箱の蓋、皿鉢は姉さんに頂いた紅猪口でもあらうか、私とあなたは御父ちゃんに御母ちやん、オ梅ちゃんは何が好き。私は姉さん。それならあなたは姉さんに、太郎ちゃんと次郎ちゃん



は、其の弟オヤオ米ちゃんは何がよからう、御祖母ちゃんにおなりよと、忽ち睦じき一小家庭は作

られた。
朝の處をしませう、皆臥てお出でよ、御母ちやんは起きて飯炊くからとの母の言葉に、一同彼處の莚に臥た、中の太郎は頭をあげ、オッマちやんはオ三どんかえ。わらいやだよ。オ三どんばかり飯たくものぢやない。御母ちやんがする處もあらアねえ、清ちやんと呼ばれて、父の清太は、さうだとも、オッマちやんは働き者だ。賞められたので嬉しさう微笑みながら、籠の草花を鍋に入れ、竈に松葉をくべて飯炊くこなし暫くありて、さア飯が出來たからお起きよ。一同起きんとするを清太を遮り、起きなといつたつて起きないのよ。やかましい關うなつて臥てる事さ、宜いていつた時お起きよ。分つたかえ。なんだらうねえ此の人は、夜はあんなに早くから、朝はおそくまで、まア何時だと思つてお出だ、もう八時ぢやないか、顔に日が當つてるよ。碌な働きの出來つこはないねえ、此のざまだもの、起きなつてばそれと、布團を剝ぐ眞似するに、起きても宜いのかねと起きる、太郎の實に眠さうな欠伸は、早飽きたでもあらうか。末の次郎は端に座り、板を手にして何事か呟いて居る、次郎ちやん何をしてるの。御經なんぞお止しよ。緣起が惡い。朝つから。そうしてそれは俎板ぢやないか。嘗めてるのかえ、アッハッハ…………と清太に笑はれて下においた。此處へお座りとの母の差圖に、一同父母の前に座り、オ米は、眞前側にある皿を出すをお前は御祖母ちやんだから後におしよと小聲で、後は高吟、若い者は稼ぎに出るんだから、前に喰べなきアならないが、朝から晩まで徒臥てるものは後でも宜いぢやないかね。五月蠅いねえ、退込んでおいでとどんだ母もあつたもの、流石に父は驚いた顔、御祖母ちや

んはあらあんな事をいつてるせ。前に喰べて店の番でも爲て貰つた方が却つて宜いやね。オヽ私は御祖母ちやんだつけね。忘れて居た。それなら部屋で鞋の足袋でもさしませうとオ米は退いた。宜いから此處へお出よ。それそのお皿をれかし、これはお肴、これはお汁、これはお飯と各盛り分け、さアれたべよ。オ梅はきよろ〳〵眼、大層美い物があるねえ。月給がわたつたの、さうじやないのよ、稼いでお錢を取つたからとオツマのいへば、利けたから御祝するのよと清太はうち消す、オ米は側から、此の南瓜をたべてごらん、御祖母ちやんが作つたのだから。さうかえ。美いねえと喰う眞似をする。太郎と次郎はもぢ〳〵人の顔ばかりを見て居るを、何だねえ、此の子は、ご食をたべないの、後でたべるていつたつて遣りアしないよ、早くたべておしまへと母に叱られて太郎は眼をみはりてこんな、物食べられるもんか。たべる眞似をするんだよ。姉さんの樣にと清太は敎ゆる。氣がきかないねー、眞實に此の子は、御母さんのいふ事をきかないとかうしてやるよと、オツマは太郎の頭をうつた。屹と睨んだ太郎の面は、みる〳〵赤くなつたが、突と立つや側にあつた庖丁のサアベルを手に取り、オツマ目掛けてふり廻した。其の權幕に魂を消し、外の者まで、ちり〳〵ばらばら、逃げた後は草花狼籍、一人劔を提げ立つて居る樣は、勝酒のんで居る敵の陣屋へふんごんで、當るにまかせて斬りちらし、群れる敵を追ひ拂つた樣だとでもいはうか、其の後を睨み、フン弱虫、負けアがつたと、猶勇を口から漏して居たが。彼方に次郎はさけて、此方を見て居るに、其方に馳けて、次郎ちやんお出よ。あんな者と遊ばないで、二人で仲善く遊びませう。

オツマは辻の車屋の娘で、清太は長屋の唐物屋の悴て、オ米はうらの農夫の娘で、オ梅は裁判所の雇の娘で、末の次郎は中學敎師の息子で、そして、大刀風、實新ら草花をふき散したのは、陸軍大尉の一人息子であつた。

ねむけざまし

二世後咲

まが〱しきものは

臥ながら、ものを食ふ。……………何ごともなきに長大息するもの、何事もなきに、ひとり、ニヤ〱笑ふもの、すでに狂人めきたりや。……………寢室にいりて、歌をうたふ。はなうたなどは、馬鹿らしくも、また、すさましけれなり。…………向ハチマキ大アグラにて、大なる茶碗を口よりはなさず、飯をカッコム人。これは、下賤の男にのみなりなりは斯樣のものも、あるめり。……………茶碗とりあげぬうち、まづもツて匙箸を突き

たつろ。

屹度貧乏になること請合の法

主婦サンの、しだらなきものをおくこと。……………早く臥て、おそく起ること。…………………ムヤミに用もなきものを買ひいるゝこと。…………業務として、相撲、芝居、寄席にゆくこと。…………イヤナニ正何位何爵なんどゝ、勿體らしき人と、つきあひあることをヒドクうれしがり、いらがるものなどは、全く貧乏になれる資格を充分に備へたるものなり。

見て見よからぬもの

むくつけき田舎人の新しき洋服着たる。……………口やかましき主婦サンの下婢を叱りとばす。…………へつらひ者が、上官に御目どほりなれがうて、ゆるされた時のありさま。寫眞にとつておいて見せたら、當人でさへ、さすがに、サゾうんざりすることならむかし。●坊主の顔を赤めて怒ツた顔。コレハ太平洋でとれました、大鮹のミセモノでござい、見るは一ツ時、はなしは末代。木戸はわづかに一錢と五厘。ソレも御もがりでよろ

しい、サアいらッしやい、サアいらッしやアいといひたくなる代物なり。

悔んでかへらぬは

酒なのみすごして、あとの病氣。…………ウツカリよろしうございと請けこんだ、あとのくろしみ。…………ヤタラニ喋舌りちらし、後におだんきな聞かされる。ぶきりやう此の上なし。………旅にありて、イヤまた此の次にと名所舊跡な見のこしたる。よく有ることにて。………少年の時になまけて仕舞うて、年とりてから、殘念がッても、泣いたッて、わめいたッて、追ひつき申さずさふらふ。

栗鼠の三郎（第一回）

聽雪女史

皆さんがたが、御存じの、あの、筑波山には、いろ〳〵の獸が、住んで居ますか。麓の方の所には、少さい獸ばかり、住んで居て、石段のつい横に、大きな朽木が、ありましたが。其の中には、皆さんがたが、御存の、あの尾が、身体よりも長くて、それから毛色に、艶があつて、顔は鼠に、似て居りまする、栗鼠が住んで居りました。此の栗鼠の家族は、お父さんと、お母さんと、其に息子の、太郎、次郎、三郎の三人と、都合五人で、御座りまするが、一番弟の三郎は、怠惰者て、親栗鼠や、太郎や、次郎が、いつも外へ、勞働に、行きまするのを、知らん顔して、寢ほうばかりして、居りました。で、或日のこと、兄の太郎と、二番目の次郎とは、之では、いけないと、三郎を起して外に一所に、働に連れ出さうとしました。

太郎「おい！、三ちやん三ちやん、さあ、今日は僕等と、一所に、かせぎに、行かうぢやないか。昨夕もお父さんが、大層怒つて入らしたし、

其にお前のやうに、そう毎日毎日怠惰けて居ると、近所の仲間に、見ともないじやないかよ。

三郎「兄さんは、兄さんで、早くどこへなりと、入らしやい、僕はいやだ、眠いんですもの。

と、またもや、尾をまきかへて、眠てしまいました。

次郎「三ちやん、三ちやん、そんな事を云はすにさ。ほんとに、お起きよ。僕等は、毎日毎日、夜が明けぬ前から、かせぎに出て、胡桃や、樫の實なんかを、拾つて來るのに、お前ばかりは、寐ては食い、食つては寐おるが。一体其で、自分のつとめが濟むと思つて居るのかね。其も、今はいゝさ、これから、雪でも降る樣に、なつたなら、奈何うするつもりなのだへ。お前、雪が降るのは、もう直きですよ。

と、云ひながら、ゆり起しました。すると、怠惰者の三郎は、漸と眼を開いて、何だ面倒くさいと云ふ風を見せながら。

三郎「兄さん達は、僕の眼から見ますと、何と云つたら、いゝだろう。まあ、体のいゝ、日雇ですね。朝から晩まで、一日爪のへる程、馳けまわり、漸と胡桃の、一つ二つが、關の山で、さあ、冬の用意をするのは悪いとは云いませんが、僕には、僕の方才があるむですよ。

と、云つて、寢てしまいました。で太郎も、次郎も、仕方が、ありませんから。其の儘山へ出ていつて、しまいました。すると三郎は、二匹が出て行きました後を見送りまして、

三郎「あアこれでよい〳〵、世の中に寢るほど樂はなかりけりさ。浮世の馬鹿は起きて働け」と、今朝も樵夫の奴が、謠つていつた。ほんにそ

ーだ。ほんとだよ。僕とても、兄さん達の云ふことは、百も千も、承知の半兵衛だが、僕には、大望があるから、わざと、寢ひつて食つて、居るのだ。どれ〳〵、枯葉棚に埋てゐる、胡桃でも食つてやろわい。

と云ひまして、胡桃を、堀りだしかけました。ところが、或日のことでした。彼の三郎の、お父さんが、いつもの森の常盤木の上に、昇つて、何んだが、食物をさがして居ました。ところが、彼方から、喇叭の響が、聞えてきました。そこで、例のお父さんは、こら大變だと、早速尾を、くりつと、まきあげまして、圓い〳〵眼を、まー一つ、まるくして、木がくれて居りました。するとねー、大變大變、どや〳〵と四人の小供がね、鳥撃帽子を被ぶりましてね。獵装飾で、

小供「こゝじや、こゝじや。何んでも、栗鼠の目つかるのは。さー君達、四方に分れて、目つけらー

と、云ひもつて、やつてきました。これはと驚いて、栗鼠は一生懸命に飛び下りまして、そこらの、草樹の眼に入らばこそ。さんざ、踏みにじりまして、とうどう、巣に馳けつけました。すると、巣の内には三郎が、食ひかけの胡桃を枕にいたしまして、らく〳〵と、ねて居りました。

三郎「誰じや！、がたすと〳〵と、さわがしいじやないか?。

と、怒なりちらしました。

父栗「己だ、お前はそこに、何して居るのじや。この晝間に！。

と、怒なり返しをいたしました。

三郎「うーん、うーん、折角いゝ寢心に、なつて居つたものを、いやなことだ。さあ、これから

父奴のお目玉頂戴するのかなー。

と、獨言云ひもつて、眼をこすり〳〵、起き上りまして。

三郎「お父さん、何をぐず〳〵、お云ひなさるのです。

と、云ひもつて、父栗鼠の前に、少さくなつて、坐りました。ところで、お父さんは、ほんおこりに怒りまして、

父栗「三郎よ。もつと前に、こい、おまへは、何んて云ふことだ。父さんは、今も今で、いたづら小僧の爲めに、大切ない命を取られるところであつたわい。此はどの艱苦をするのも、つまり、れ前達のためじや程に。だから、近頃は、太郎も、次郎も、少しは、己等の手助になつて來た。すると、お前は、もう一匹だけの長になつてきて、まだ其の樣なてだらくじや、仕方がない。幾度諭して、きかしても、わからぬ奴は、だめじやによつて、そんな怠惰者は、父さんの、子じやないから、此の巣におくわけには、いかぬ。さあ、今からどこかへ、出て行くがいいさあ、早く〳〵。

三郎「ハイお父さん、そんなに怒つちやいけません僕はね——、僕で、一ついゝ、觀望があるのですよ。御覽なさい、今年は、雪が大層に、多い冬ですよ、ですが、今の内に、各自一つや二つの、胡桃を拾つて、畜へて入らしたつて、どをして〳〵足るものですか。さあそをなつた、時には、此の三郎が、皆さんの前に、僕の腕前を、御覽に入れましやうと思つて、今の内は、寢たり、食つたりして、遊んで居るのです、どをして、お父さんのやうに働いてたまるものですか。

と、云ひしらまくれましたが。今度は、そふ甘くいかないで、とう〳〵、父におつぱりだされまして、馬鹿な顔して、出てゆきました。

三郎「トン、トン、ト、コツ、コツ、コツ、鳥渡たのみます」

白鼠「どなたでござりますかしりませんが、今晩は寒くて、よく出ませんから、お斷り申ます。」

三郎「御尤でござりまするが、實は、先日、お約束申置きましたゆゑ。」

白鼠「ハイ、御名前を！」

三郎「ハイ、私は筑波山のふもとの、洞穴に住んで居ました、栗鼠の三郎でござります。先達貴嬢さまが、お庭の隅で、猫攻撃をお企てなさいましたとき、一方の助手を致しました、三郎でござりますと、御主人に通じて下さい。」

白鼠「オヤ、オヤ、三郎さんで、入らゑやいましたか、まあ、私と申しましたことが、あるでしやうが、何んだか、今夜は、お聲がちがつたやうでさあ入らしやいませ。此の夜ふけに、何の御用でござりますか。」

とれ春と申ました、白鼠の赤眼が、言葉やさしくでむかへました。

三郎「ハイ、ハイ、先日も申上ました通り、貴嬢は、至極結搆な、お住居に入らしやいまして、御主人にも、御寵愛をうけて入らしやるし。するから、此の寒天にも、一向へいきなお顔でれ暮なさるが、實は、吾〳〵栗鼠のやうなものはね、殆んど、困難ですよ。ですが、今夜は御相談にまゐりました。」

お春「ソレハ、ソレハ、能く入らしやいました、私も其の後は、おたづねしやうと、思ふて、居て、つひ、！だが、先日の猫ですね！。あれ

は、御主人の第一等に、御寵愛をうけて居ました黄鳥にかゝりまして、つひ、二三日前に放逐をくらいましたよ。しかしまあ、貴殿には、こんな夜中に、ぶらぶら、外出なさいましても、御両親には、なんとも、…………!」

三郎「ハイ、實は、私は、近頃の両親の安否は知らないのですよ!。」

お春「ソレハ、マー、如何したわけで御座りますか。」

三郎「僕は秋の末に、父上から勘氣をうけまして放逐せられましたので。」

お春「ソレハマー、どう云ふわけか、委う伺ひたいものですなあ。」

三郎「ナニ別のことでもござりませんが、僕のお父さんは、正直一方で、頑固な、たちですから、自分の望まない業をすると、いつも、正反對なのです。今度も、その結果なのです。」

お春「ソレは、御尤なわけですが。まあ、此の菓子を、一つめしあがれ。これは、私が、先程御主人が、明日曜日のためにそなへて、おきなさつたものを、一つ頂戴いたしましたのですから、さあ!。」

三郎「ソレは、有難う存じます。」と例の尾をまきあげて、両手でもちながら コツ、コツ、とはじめました。

お春「ソコデ、貴殿と、お父上さまと、正反對と、おしやるのは、如何なる理由があるのでしやう。」

三郎「ハイ、僕は至つて、働くことが、嫌ひでなりませんから、働かなくて生活のできる方法ばかり考へて居りますが、いやもう、世の中



には、身體が、自由で働かないで、氣樂に生活のできるといふことはむづかしい。ところで、僕は、長い前から、寢て考へて居つたのです。すると、父上さん、兄さんなどは、僕を怠惰者とか、不孝ものとか、申まして、終に僕を、放逐してしまつたのです。でも、僕は、いくら考へても、人間の玩弄物にしられるのも、野ばな話だと、思ひますし。何かいい方法がないでしやうか。僕がねー、澤山食粮さへ、持つて行つてやれば、兩親はすぐに、ゆるして、呉るのですよ。どんなものです。貴孃のお考は如何です。」

（未完）



以利沙伯　　東久世通禧

西の海くにてふくにはいきりすの
ふねの旗手になひきけるかな

郭子儀　　高崎正風

くらゐ山あらしもしらぬ松がけに
この下くさもたちさかえつゝ

里春月　　久我建通

もとよりの朧の淸みつかすむなり
月のあはれもおほはらのさと

烟草　　鍋島直大

立のほるけむりとなりてうき事を
わすれ草こそうれしかりけれ

野春風　前田利嗣
うぐひすの聲にひかれて來れども
袖またさむき野べのあさかぜ

橋邊柳　水野忠敬
わたりゆく橋の上までかゝりけり
風にかたよるあをやぎのいと

夜春雨　長谷信成
埋火をはなれてねたるはるの夜は
あめの音さへのどかなりけり

春山　宮地嚴夫
春かすみたなびき初てふしのねも
ひことに遠くなりまさるかな

和布刈　北郷久政
門司の松浦の火見えぬわたつみの
かみのめかりや今つかふらん

朝鶯　大口鯛二
日たくれは大かたよそに移りけり
わか山かけのうぐひすのこゑ

春朝　蜂須賀隨子
うぐひすの朝戸あけよと鳴こゑに
またねの夢をさましつるかな

海邊春月　鍋島榮子
こよろぎの磯松かせもおとたえて
長閑にかすむはるの夜のつき

國旗　前田朗子
へだゝりしこと國までもうち靡き
光かゝやく日のみはたかな

溪梅　南郷柳子
溪かげの岩まにさけるうめのはな
きえ殘りたるうめかとも見ゆ

千代野尼　柳原愛子
谷水にやどれるかけのくだけすは

こゝろの月もすますやあらまし

河上春月　　小池道子

隅田川おぼろつき夜になりぬらし
くれたる岸にはなのかげ見ゆ

春海　　鶴久子

みるまゝにかすみ渡りて大ふねの
行へもわかずはるのうなはら

長春　　服部磯子

いづこまで香に匂ふらんやま里の
垣ねのはらにかぜわたる日は

海邊霞　　中島歌子

貝拾ふひとこゑすなりたちわたる
かすみのおくもひかたなる覽

道臣命　　河村重子

八咫烏みちびきなしてすめらぎの
みゆめのうらにあへる君かな

猫を見て思ふことあり

竹園女史

年毎に老いまさり行く身は、このごろの寒さたへがたうおぼえて、むづかしき友がりおとづれむこともものうくて、只したしまるゝは、埋火のみなりけり。さるをきのふより、室の梅は咲そめぬ。けさは鶯の聲もきゝつるなど、若き人々のいひあへるに、いざとて端近う出で、かなたこなた打ち見るに竹垣のもとに、眞白なる猫のこゝちよげに眠り居たり。われ日頃猫をめでず、されど、あまりにきよらなれば、來よ〳〵とよべば、おどろきたるさまして、はしりさりぬ。をりしもわがよびたる聲をば聞けむ。木かげより出來る猫あり。毛色すべて黒く、眼光り尾長くたれたり。世にからす猫とかいふなるべし。あなきたなし、とく去ずやと、おひやれども、えゆかで、猶わがほとりに

きたり、ねよとなきてものこふさまよく馴れたり。さすがににくしともおもはず魚などわたふれば、うれしげに打食ふ。かく馴行まゝに、はしめきたなしと思ひし心もうせて、何くれのもの取置きて、かれがきたるを待ことゝはなりぬ。あはれ數ならぬ猫すらかくのごとし。いはんや人にして、顔かたちうるはしくとも、心あしからむには、誰かは愛べき。よし、顔かたちあしくとも、心うるはしからむには、誰かはにくむべき。など思ひつづくる折しも入來る少女の、歌にまれ、文にまれ、をしへとなるべきもの書てよとこへるまゝにあたへぬ。

房州日記　第五回

柴田静榮

船方の觀音とかやいへる山のふもと打すぎて、いつしか船は、北條の里、かゝみが浦に入りぬ。海の水いと清し。やうやう港に、近づくまゝに、滊笛一聲高く着港を報じたり。時に午前九時前なり。船は停止せり。艀舟は、おのれらを迎へたり。船の内の人は、おのがじゝ、用意す。おのれらも、今はさきつ日の朝たのけしきをおもひいでゝ、恐る恐る甲板よりおり、辛苦じて艀舟にのり移りて、岸邊につきぬ。人々の多かりける中より、走り出で萬歳と唱ふるものは、我が友なり。互に手をとりかはしつゝよろこび助けられて、濱ちかき旅館の高どのにのぼりぬ。窓おしひらけば、まづ正面に、海のかなたに見ゆる富士の山は、朝日の光に映えて、水のおもには、影さかしまにうつりたり。その風姿のけだかきこと、げに動きなき御國の礎と見えたり。伊豆の島々はのかに見えて、海の上にても、陸にても、おそろしき心地せられし

身の疲勞も、うちわすられて、心ゆくこと限なし。

はるばると見ゆるかぎりは雲井にて
浪間にうかぶ富士の遠山

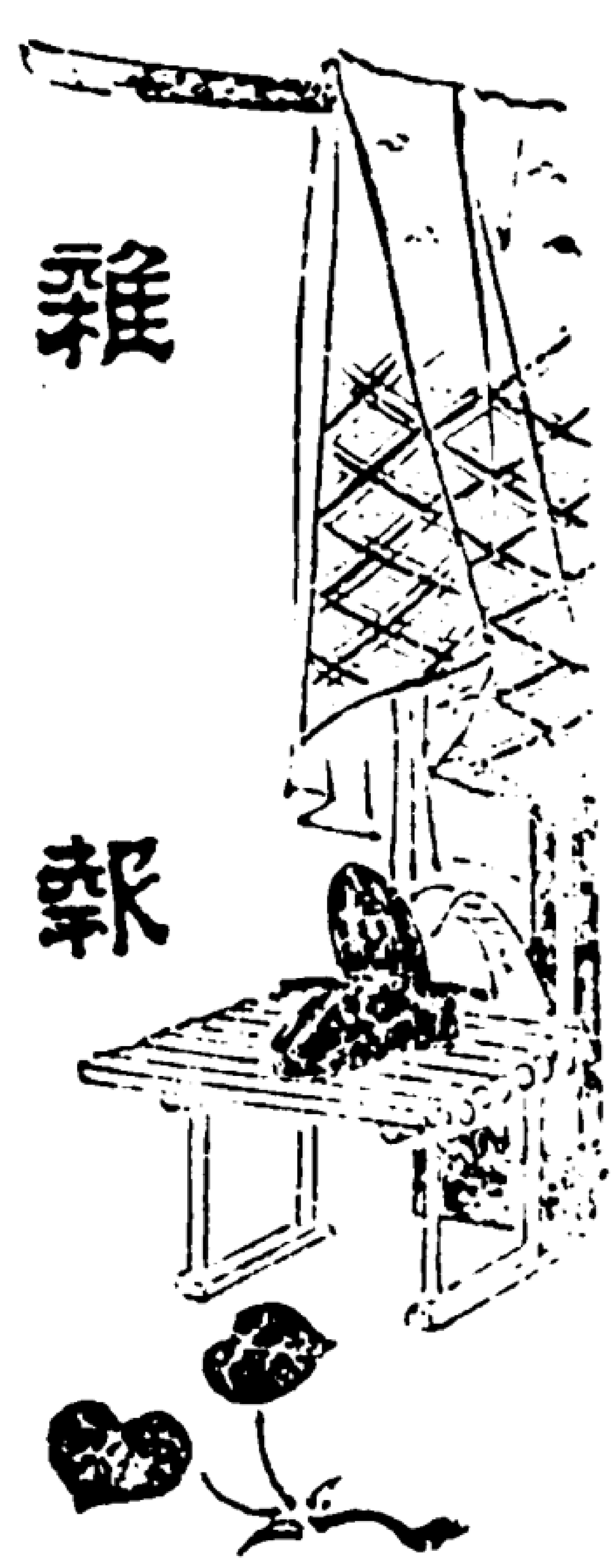
しばしこゝに息みて後、やがて、車にうちのり、友の家に着きぬ。この時、八月三日午前十一時なりき。友の深き志のうちたのまれて、我が家の心地す。やがておのれは、湯に入り、晝の膳にさしむかひて、彼等が歡迎せるこゝろざしをうけたり。おのれはつかれたればうちねぬ。午後三時過る頃より、友のよびおこして、海水浴はいかにと誘ふ。いざと答へつゝゆく。友はあやしげなる帽子うち被りて、裾たかく跣足なり。そがいでたち、畫に見る海女に異ならず。おのれは、例のまゝにて、つれだちたり。そも、此の友の家は、この村の村長にて、前栽には、四季の草木をうゑ、池のかなたには、築山たかく、ひきつゞく籔の一むらは、すゞしき風にさわぎつゝ、左の方も、右の方も、悉く田畠のめぐれる中に、柴の折戸あり。海には、二町ばかり隔たりたれど、折戸あくれば、松原なり。此の松原は、磯邊に通ふ道なり。歩むとすれど、下駄高ければ、砂路にうちいれられて、容易ならねば、はだしにて行く。あはれ此のすがたして、都の大路歩みたらむには、狂女とよばれもやせんなどと、語らいつゝゆく。夕日の影なゝめにさして、黄金色なる浪の花は、松の木の間より見えて、いとゆかし。かの白沙青松とは、かゝる眺めならむかし。渚にたてる海女のとま屋に至り、衣服ぬぎかへて、海に入りたり。漁りする海士小舟の、數しらず沖の方に、ただよふさまいとをかし。

いつきても浪靜かなり鏡浦
こぎつる船のかけ見ゆるまで

といへむ

うちよする浪ちの末にしられけり
雲井を渡るあまのつり舟

などうめきつゝ、岸にのぼりゆき、もとの衣にかへつゝ、磯邊を、こゝかしこそゞろあるきす。夕日かげかなたに落ちて、海の上はのくらく、星の光り三つ四つ、かゞやきいでたれば、翌朝を約して、友と共に、もと來し松原うちたどりつゝ、宿にかへりぬ。



雜報

御慶事

○神宮奉告祭　いにし十一日、皇太子殿下御妃を娶させらる事となりぬるより伊勢大廟に於いて午前九時より、奉告祭をつかひまつれり。園池掌典奉告勅使として、參向御奉告文の朗讀、其の他嚴肅なる御祭式をあげられたり。

○賢所奉告祭　また、同時に賢所にても、奉告祭をつかひまつられたりしが　天皇陛下、御假床に在し給ふを以て、岩倉掌典長に御代拜を仰付けられ、皇后陛下にも、鐵權掌侍に、仰付けられ　皇太子殿下には高辻東宮侍從長奉仕せられしと承る。

○泉山等の奉告祭　また、同時に勅使北郷掌典孝明天皇御陵に奉告祭を奉仕られたり。午後よりは、大和に至り　神武天皇の御陵にも奉仕れり。

○告示

宮內省告示第二號

今十一日　皇太子嘉仁親王殿下從一位勳一等公

爵九條道孝第四女節子と結婚を約せらる

明治三十三年二月十一日

宮内大臣 子爵 田中 光顯

○辭令

皇太子殿下御結婚の成約奉告勅使として 神宮へ參向被仰付

掌典 園池 實康

皇太子殿下御結婚の成約奉告勅使として 神武天皇御陵並 孝明天皇御陵へ參向被仰付

掌典 北郷 久政

（以上二月九日宮内省）

○宮廷錄事

賢所皇靈神殿皇太子殿下御結婚の成約奉告祭次第 去十一日 賢所 皇靈神殿 皇太子殿下御結婚の御成約奉告次第左の如し

賢所 皇靈 神殿 皇太子殿下御結婚の成約奉告祭次第

午前第九時御殿の御飾を奉仕す

次式部職官員著床

次親王大勳位各大臣樞密院議長大臣禮遇宮内省勅任官著床

次 賢所 皇靈 神殿開扉

此間奏樂

次神饌及御幣物を供す

此間奏樂

次祝詞

次 皇太子殿下御代拜

次著床諸員拜禮

次掛判任官拜禮

次御幣物及神饌を撤す

此間奏樂

次閉扉

此間奏樂

次各退出

○參賀並に祝詞 去十二日宮内大臣より左の通り通達ありたり

皇太子殿下御結婚御成約に付今十一日より三日の内左記の向

今上皇后兩陛下へ參賀且皇太子殿下へ御祝詞言上

一大勳位　親任官
一公爵　從一位　勳一等
一宮内勅任官
一各廳勅任官總代各一名
一侯伯子男爵總代各一名
一麝香間祗候總代一名
一錦鷄間祗候總代一名
一貴族院議長　衆議院議長
以上夫人共但夫人は皇后陛下へ參賀
一宮内省奏任官各廳奏任官總代各一名

○御發表御濟奏上　右の御事ども、滯りなく終へたる旨、即日、宮内大臣、侍從長等より兩陛下に及ばれたりと承る。

○葉山御用邸伺候　また、岩倉侍從職幹事は、節子姫、御兄君正四位道實公と共に、昨日午前九時二十分新橋發滊車にて、葉山御用邸に伺候し、御發表、滯りなく、相濟みたる旨言上せられたりとぞ。

○賀表捧呈　同日、朝來、葉山御用邸に賀表を捧呈する者、引きも切らず。其の重なる方を擧ぐれば、小松彰仁親王殿下を始め奉り、各皇族方、及び、山縣總理大臣以下、各大臣、黑田樞密院議長以下、各顧問官、田中宮内大臣以下、宮内各高等官、英、露、米、佛、獨、伊、白、清、墺、西、墨、蘭、暹等、各公使、山本日本銀行總裁、近藤郵船會社長、澁澤榮一大倉喜八郎等、官民重立たる者、數百人の多きに及びたりと承る。

○皇太子殿下に金塊の獻納　北海道枝幸砂金採集者の一人なる、廣谷李太郎氏は、金塊の七十五匁あるものを、こたび殿下の御慶事を祝賀せんためさゝげまつらむと願出でたりと。家持の歌など思ひやられて、いと目出たし。

○九條家の祝問　同家に於いてもまた、十一日にはあさまだきより、官民の祝問するも多く、其の重なる人々は、一條、鷹司、近衛、大谷、等、親戚は云ふも更なり、田中宮内大臣、及び、内官、山縣首相、及び、各大臣等にて、一時は殆んど、應接に暇なき程なりしとぞ。

○華族女學校の祝賀　華族女學校にては、同日午前八時より、例年の如く、紀元の祝賀式を催せしが、當日は、特に同校に御在學せられし、九條節子姫が、東宮妃に娶さるゝ旨仰せ事ありしに付き、一層丁重なる儀式を行ひ、皇太子殿下、及び、妃殿下の萬歳をも、三唱し奉りしと云ふ。

○節子姫の御調度　目下、漆工家、帝室技藝員川の邊一朝翁が、御用承はりたる日本古式の御衣裳簞笥、一對、高五尺五六寸、觀音扉にして、檜木呂色地に九條家の定紋藤の丸の金蒔繪紋散しにて、最下の引出にて、香を燃き占むる設備をなし、其の引出には、源氏香の圖、幷に、源氏車の透し彫りとなし。頗る善美の御品なり。又、御洋裝簞笥は、藤の丸定紋散しの蒔繪を施し、此の外御椅子寐臺とも、洋式に係る御調度は、一切、杉田幸五郎氏が承り、何れも、目下丹精を凝らして、製作中なりとぞ。

○東宮御婚儀御用掛　十一日の佳辰を以て、東宮御婚儀、御用掛、數名を新設せられ、其の掛長として、同日左の如く仰付られたり。

皇后宮大夫正三位勳一等子爵　香川敬三
東宮御婚儀御用掛長被仰付

尙、同日、宮內高等官十名は、右、御用掛、仰付られたるが、同日の官報を以て、發表せられたり。

○皇太子殿下の御使九條公邸に臨む　兼て、仰せ

出されし如し皇太子殿下御使として、中山東宮大夫は、いにし十一日午前八時、赤坂福吉町なる九條公爵邸に赴かれたり。御使の馬車九條邸に到着するや、九條道孝公は、大禮服帯勲の正裝にて、玄關に迎へ、家令以下は、階前にて挨拶しまつる。御使は、公爵の案内のまゝ、奥の廣間に入られ、公爵、及節子姫の前に於いて　皇太子殿下の仰せ言を傳へらる。公爵また節子姫は、謹んで、御受けの趣陳述し。此に當日の要務を終り、御使は、別間に於いて、茶菓の饗應を受け、間もなく、退出せられたるが、當日　皇太子殿下より、節子姫に贈らせられたる御品は、左の如し。

織物　五卷　御樽　一荷　鮮鯛　一蓋

○九條公の御禮參内　愈々皇太子殿下御妃に九條節子姫を娶らるゝ仰出しありしより、九條道孝公は、殿下の御使に接せられたる後、直に御禮の爲め參内せられたるが、陛下御假床中なるに付き、田中宮内大臣に面接し、厚く御禮の旨言上げたりと。

○皇室と九條家　現時公爵の最高位にある華族は、九條家を始めとし、岩倉、鷹司、二條、徳川、近衛、島津、一條、毛利、三條、島津(忠重)の十一家にして、其の高下、固より差別を立てゝ云ふべくもあらざれど、九條家は、近衛、鷹司、一條、二條家と共に、昔より五攝家と稱せられて、古來最貴の公卿たり。中世以後　皇后の位に備はらせられたる多くは、藤原氏の出にして、藤原氏の系統中に就きて、多くは、五攝家より出でさせられたりき。

藤原氏は、人も知る如く神武天皇元年大嘗會に、天神の壽詞を奏すと記紀に載せられたる、天種子命の祖、天兒屋命の裔にして、天兒屋命二十

二世の孫、鎌足公に至りて、藤原姓を給はり鎌足公が、中兄皇子を扶けて、帝位を安んじたるより、藤原氏は、皇室、第一の藩屏となり、藤原氏二世の祖、不比等公は、天智帝の淸き御血統を承けて、いと尊き方なりし事は、歷史に明記せられたるあるをや。藤原氏は實に、普通の貴族にはあらぬなり。

鎌足公十七代の孫、忠通公の子に至つて、九條、近衛、松殿の三家に分れたりしが、松殿家は、斷絶して傳はらず、九條家は兼實公を第一世とし。

良經—道家—教實—忠家—忠教—師教—房實—道教—經教
忠基—滿家—政基—尙經—植通—兼孝—幸家—道房—兼
晴—輔實—師孝—幸教—植基—尙實—道家—輔家—輔嗣
尙忠—(幸經)

の諸公を經て、血統連綿として、當代の從一位勳一等道孝公に傳はり、忠通公の子、基實公の裔たる近衛家と共に藤原代の正統を承け、而して、九條家第三世道家公の子に至りて、二條、一條の二家を分ち、良實公を、二條家の祖とし、實經公を、一條家の祖となし、共に藤を定紋とし、近衛家にては、第三世家實公の子、兼平公を分ちて、鷹司家を立て、共に杜丹を定紋として、五攝家の流れ愈々淸く、藤原氏の裔は、愈々榮えたり。

鎌足公、以來、不比等公以來忠通公に至るまで、皇室と藤原氏との御血統に就きては、今更ら申すまでもなきことゝなるが、九條家の興りたるより、藤原氏の一正統たる九條家より出でゝ、皇后の御位に備はり給へる紀錄を案ずるに、左の如きあり。

後鳥羽院天皇　中宮　任子　(宜秋門院)
攝政太政大臣九條兼實公第一女

順德院天皇　中宮　立子　(東一條院)
仲恭天皇御母
攝政太政大臣九條良經公第一女

後堀河院天皇　中宮　竴子　（藻璧門院）
四條院天皇御母
攝政太政大臣九條道家公第一女

四條院天皇　准三宮姞子　（宣仁門院）
攝政九條教實公第一女

孝明天皇　皇后　夙子　（英照皇太后）
關白准三宮九條尙忠公第六女

されば、四條院天皇に於かせられては、太后も、九條家の出にして、皇后も、亦九條家の出なりしなり。更に以上別記したる、歷代皇后の御母の血統を案ずるに、左の如きあり。

中宮　任子　御母藤原氏中宮亮季行御女
中宮　立子　御母藤原氏權中納言能保御女
中宮　竴子　御母西園寺太政大臣公經御女
中宮　姞子　御母西園寺太政大臣公經御女
英照皇太后　御母大納言唐橋在熙御女

尙は申すも、畏きことながら、現代仰ぎ奉る皇后陛下が、一條家より出でさせ給へるを始めとして、九條家の同統たる、一條、二條兩家と皇室との御血緣を案じまつれば九條家の、我が皇室に於ける關係の如何に深きかを知るに足らむ。英照皇太后が、九條家より出でさせ給へるより、皇室と九條家との御關係、更に深く、道孝公、第二の御女、範子姬には、去し廿八年、菊麿王の妃に娶されて山階宮妃殿下と仰がれ給へるに、今や第四の御女節子姬が、皇太子殿下妃の娶され給ふは、深き御因緣にして、藤原の正統たる九條家の血統は、固より尋常遺族と同じからざるなり。

●內親王大磯御成　常宮周宮兩內親王殿下は、五日、午前九時廿分高輪御殿御出門十時十分、品川御發車御養育主任佐々木伯夫妻、幷に御附婦人數名を從へさせられ、大磯にわたらせられたり。大磯は大隈伯、古河市兵衛氏別莊を御旅館と定めさせられ、多分、來る三月頃迄御滯在相成る筈な

り。

●王子降誕　去月二十七日、邦憲王殿下の妃好子殿下、王子をあげさせられ恒憲と名けまつる。

●小松宮殿下の珊瑚閣御遊覧　同宮殿下には、三日淺草公園六區第四號開會の珊瑚閣へ御遊覧の由にて、其の説明には、田中芳雄大迫貫爲理學士岸上鎌吉氏出席し、同閣よりは、白桃色赤等の珊瑚を殿下へ献納すると云ふ。尙は殿下御休憩所は、地内傳法院なりと承はる。右に付き、同閣は、午後一時より三時まで、公衆の縦覧を差止むると云ふ。

●まことの日本魂　今はしも、歩兵第十五旅團長にわたらせられ、新發田の軍營にて、陸軍少將比志島義輝氏と聞こゆるは、いとも雄々しき將軍にこそはべれ、將軍いまだ、幼くて、十歳ばかりのをりは、名も孫四郎と呼ばれたりき。頃は家のなりはひ貧しうて、甚だ、困難せられしも、父母に事へまつる心は、いみじうふかゝりしとぞ。母公の病の床に侍べりて、長の年月夜間も帯を解かず、ひたすら看護に身を委ね、其の孝養の様、大人も及ぶあたはずと、人々感じあひけるが、事漸く薩摩侯に聞え、賞銀を賜ふ事再度に及びぬ。

御銀　二枚　　比志島孫四郎
年十三年

右者兼而父母に致孝養就中母大病相煩候節晝夜混與付添へ看病方等行届き乍幼少別而奇特成心入之段被思召上候依之爲褒美右之通被下候條有難頂戴可仕候
右御格之通り可申渡候

八月　日　　伯　耆

御銀　二枚　　比志島孫四郎
年十五年

右乍幼少父母江孝養就中母大病相煩候節晝夜混與付添看病方行届候心入奇特之段被聞召上褒美をも被仰付置候處外同様の者共は今日無召出被遊御覧候得共兼而御側へ被召出候に付御覧の格を以て右之通頂戴被仰付候條難有可奉承知候
右御格之通り可申渡候

六月朔日　　但馬

●稅所敦子刀自逝く

前に我が社の爲に一方ならぬ盡力せられたる、稅所敦子刀自は、などりなくも、去年のみ雪とともに消ゑ失せぬ。記者こゝに淚をふるひて、刀自が、現世にて、なされし事の顚末をかゝげて、讀者諸媛と共に、弔はんとす。抑々刀自は、近衛家の﨟女にして、夙に村岡と共に、王事に勤め、後召されて、女官と爲り、累進して權掌侍に陞りたる。刀自は京都に生れ、後薩藩士稅所某に嫁す。若うして、香川景樹の門人八田知紀大人に師事して、頗る和歌に造詣す、見聞の事、皆詠題に入らざるはなし。其詠史歌集の如きは、無慮數萬首に達す。其の秀れたるものは歌人を以て自から許す鬚髯の士も及び易からざるものあり。今春　勅命を奉じて「足引の山を愛でます御心にかなふや富士の高嶺なるらむ」の一首を詠せらる。又、聞く、宮中の制、女官は、凡て、外宿を許されず、孰れも殿中に起居するの例なるに、　皇后陛下の大御心を以て、刀自は、特に外宿を許され牛込砂土原町の私邸より通勤し居たるは、傳へて、以て榮とする所なり。

○初めて、宮中に仕へられしは、明治八年三月十四日にて官途の履歷を寫す時は、

明治八年三月十四日宮內省雇被仰付◎同年六月廿三日任權掌侍◎同六月廿四日宮稱楓掌侍◎同年九月廿二日叙正七位◎廿一年二月廿三日叙從六位◎廿六年一月叙正六位◎三十年十二月廿八日叙從五位◎三十三年二月四日任掌侍◎同日特旨を以て位一級を被進叙正五位

○斯くて刀自が、宮中の特なる御役目は畏くも今上陛下の御代筆を勤むる事、　皇后陛下の御歌を拜見する事等にて、幾年の久しき忠勤をぬきんでられしが、「四五年前よりは、「高齡に及びて、日々の出仕も、定めし難儀ならん。今後は隨意勤めよ」

との畏き思召あり。御歌所の長高崎正風男もて、旨をば傳へられ、皇后陛下よりも、香川皇后宮大夫をして、數々御沙汰あらせられしが、刀自には毎に御辭退あり「數ならぬ身の斯くまでに優渥なる恩命を蒙らんは恐多し、續かん限りは、御奉公仕りたし」とて雪風の日ものかはと出仕怠ることなく、逝去の四日前、即ち、本月一日にも早朝より參內ありしが、少しく風邪の氣味なりとて、豫ては午後三時に退出すべき例なりしを、一時と覺しころ、御暇申し奉りしは、よく〳〵の事、流石に大患の兆と知られて、息女德子は取り敢へず、久木田國手を招きしに、皇后陛下にも、殊の外御思召惱せられて、程なく森永侍醫を賜はりける。尙この外にも岡玄卿氏診脈ありて、尋常の感冒ならぬよし定りければ、一家專ら安養に意を注ぎしかども、刀自には日常の行をさ〳〵欠くる所なく、三日には枕に凭りて、机にすがり、多くの女官のものし送れる詠草繰ひろげて、あれこれと取り調べ居られしを、國手のいつか聞き傳へて「其は由々しき大事なり御安養專一たるべし」と切りに爭ひ告げゝれば、家族も、大に心痛して、四日の朝には居間なる書類を、隱すが如く片附けたり。斯れば、病もおこたるならんと思ひしに、あはや、刀自には、樣子次第に勝れず、七十三歲を一期として、その日の午後にぞ逝去給ひぬ。

●孝女節婦　渡島國松前郡福山總社堂町高瀨金之丞と云ふもの丶養子德太郎の長女お靜(十四)と云ふは、目下松城尋常高等小學校に通學して、高等科第二學年の敎育を受け居る者なるが、學校中にても、特に評判能く、例年の大試驗には、必ず優等の賞を受けざるなく、他の生徒は、一人として、此の少女に及ぶものなき程の利潑者なる上、父母

に對して、孝心いと深く、絶えてその命に逆らひし事なきのみかは、朝は五時頃より、臥床を出で、食事もさら〳〵に、をのが牧場に行きて、牛乳を搾り、之を全市街に配達し、家に歸れは、又、父母の手助けにもとて、水を汲み、食事を羞めなどし、終りて登校するを常とし、且つ高瀨牧場より、松坂學校まで、往復里程五里に近き長程なるにも係らず、入校以來一日も欠席したる事なしとは、感ずべき少女なり。

○農學士田中館甲子郎氏が、去二十八年三月ごろ新婦濱子を伴ふて、北海道に行き、羽幌殖民地にて、開墾に從事し居りしに、翌二十九年十二月所用ありて、苫前村まで赴く途中、如何にしけん。踪跡を失ひしかは、濱子は言ふに及ばず、東京實兄田中館博士も訪ね來り、力の有らん限り、雪中を搜し廻りしも、其の姿を發見し得ず、遂に死亡したる者と諦めて、悲歎に暮れながら葬儀を營みしが、濱子は、今尚羽幌にありて亡夫の遺業を守り、自ら鋤鍬を執りて農業に從ひつゝあるのみか、實兄田中館博士より、開墾の費用として送り來る金員は、成るべく節儉して貯蓄し、其の幾分は東京なる父の許に送りて、實弟の學資と實家の生計とを助け、且朝夕亡夫の靈前に向ひて、其の冥福を祈りつゝありといふ。齡若き婦人の身にて、遠く僻境に亡夫の遺業を守り居るとは、世にも珍らしき節婦なる哉。

○また　道女は、信濃國北安曇郡南小谷村の農相澤忠七氏の妻なり。安政四年三月同郡中土村に生れ、父を山本伊三郎といふ。年甫めて七歲にして、同郡南小谷村、大字千國村の相澤忠七氏に養はれしが、後忠七に嫁せしは、明治八年二月の事なりき。道女の嫁ぎし忠七の家は、この先代の頃

より不幸にして、貧困に陥り加ふるに道女のとつぎし先つ方より、姑の千代女痛風症に罹りて、身体の自由を失ひたりし事なれば、家計の困難はますます甚しうなりぬ。世の常の女子ならむには、かゝる苦しき處に身を寄せずともなど、思ひいでて、振りすてもせんに資性貞實なる道女の事なれば、決してかゝる事は爲さざりけり。道女は生れつきの温良なるはいふまでもなく、其の志貞實にして、篤厚なりければ、いかにもして、家計をとゝのへ、舅姑の心を安んじ奉らむものと、日夜志を勵まし、夫を輔けて、倶々に業務をいそしみはげみ、又、よくかの病の床に臥せる姑に仕へて、看護到らざる事なく、十年の久しきに及ぶも一度も、其の志を屈する事なく、其の行を替る事もなかりき。憐れかくの如き孝子貞婦はもとより郷黨の好摸範、一國の名譽の光なり、されば、

この事隣里郷人に喧傳せられて、遂に縣知事より名譽の褒賞をうくるに至れり。かくて、この名譽なる賞與は、同じ年同じ月の二十八日に千國村中小谷村の戸長役場に於て、傳達せられぬ。時の戸長たりし細野宮太郎氏も、亦大に、この孝貞の志に感激し、贈るに綿二把を以てせられ、其の他村内の有志諸氏も、いろ〳〵金品を贈りて、其の徳を稱讃せられたりといふ。後姑千代女の終に果なくなるに及ひ、道女、大に哀惜し葬送等、何くれとなく丁寧に營みしが、これより後は、前日にも倍するほど、舅に孝養を盡し、且夫を扶けて、農事に勤しみ務めたりしかば、生計も追々富裕に赴き、やう〳〵家道も振興するに至れりといふ。道女の如きは、實に得難き貞女孝婦と謂ふべし。

○また　親のゆるさぬ徒らに、身をあやまりて、一生を苦界に沈め兩親に絶えぬ涙を袖しぼらする

不孝の子の、まゝある中に、それとこれとは事變り、清き香ほりの梅の花にもたとへつべき孝子と云は、靜岡市上石町二丁目十七番地、小川平三郎(四十六)の養女お鐵(十七)にて、平三郎は、女房お松(四十)との二人暮しなりしが、少しの義理にて、お鐵が二ッの時に預り生育居る中、お豊(十四)れ徳(四つ)の二人を儲けたるが、お鐵は所謂里ながれとなりたるものにて、兩人のものも、同人の心やさしく少しのわけ隔てもなきより、實子にも增して可愛がり、一家睦まじく暮し居けり。平三郎の家業と云ふは、駄菓子の卸賣りにして、日々車を輓きつゝ、江尻近在を商ふものなるが、其の純益とても、些少なれば、一家五人の糊口は仲々に困難の業なるに、搗て丶加へて、平三郎は昨年春頃より、不圖脚氣症に罹り、起居も自由ならぬより、働きてさへ充分ならぬ、活計は、益々困難の淵に沈みて、家內五人は其の日の糧に心碎く身とはなりけり。なべの女は、十六七才にならむには、衣服、さては化裝等のみに心するもの多からむに、引替て、お鐵は勇々しくも、心を定め今こそ養育の恩をかへす時機なれと、風俗もかたちも厭はゞこそ、脚半鞋に身をかため、まだ十六の細腕に、父が輓きたる車を輓き、寒暑風雨のわきためなく每日得意を廻はりつゝ、辛くも五人の口糊を支へ、暇ある時は、床に病む父を撫でつ摩りつして、あつく事ふるものから、兩親も、淚にくるゝばかりなり。これも奇特の至りと云ふべし。

●美ふべき春風陸中國更木村は、十數年前より賭博大に流行し、惡風村內に彌蔓するに至りしを、平野千代治なるもの、深く之を憂ひ、或は多額の金員を費して、芝居を興行し、又擊劍會

を起して、青年の加盟を奬勵し、更に又百五十餘圓を投じて、神樂を始め、一意專心惡風に浸染したる青年の心を收攬せんことに務めたる結果、漸く、村内賭博をなすものなきに至る。

○美擧　福井縣城崎村は、戸數僅三百を超えざる小村なれども、村民は、孰も敎育熱心にして、曩に九百五十圓を投じて、校舍敷地三百餘坪を寄附せしが、更に校舍建築のため、三千餘圓を投じ、近々、其の工事を起さんとす。之を聞きたる同村青年會も、又平素勤儉貯蓄したる金二百圓を、新築費に寄附し、且つ地均工事に手傳せんことを申出づ。

○青年の美風　上毛上沖之郷素人芝居流行し、青年輩競ふて、之に加はりしを、村内重立者、之を憂ひ、矯風の目的を以て、共立會と云ふを設け、夜會を始めしに、青年翻然として悟り、一同之に加はり、今や基本財産さへ出來し、敎育上必要なる器具を購入す。

○共濟慈善會の成績　本所區若宮町共濟慈善會に於て、昨年四月一日より、本年一月二十五日までに、各警察署、親族等より入塲せしめたる不良少年、及び、孤兒は、合計二百九十四人、内男二百八十五人、女九人にして、入塲者の成績頗る好く、有志者の義損金も、追々增加する模樣なりといふ。

○學生の篤行　仙臺第二高等學校學生二名片平町路傍に小學生、佐々木守之助(九才)が急病を發し困臥せるを認め、百方慰諭して、住所を問ひ、交々背負ひて、自宅に送り屆け、其氏名を問はるゝも告るに足らずとて、直に辨し去る無下に、學生の風衰れたる今日には、珍しからずや。

●切手貯金の實施　遞信省にては、愈々三月十

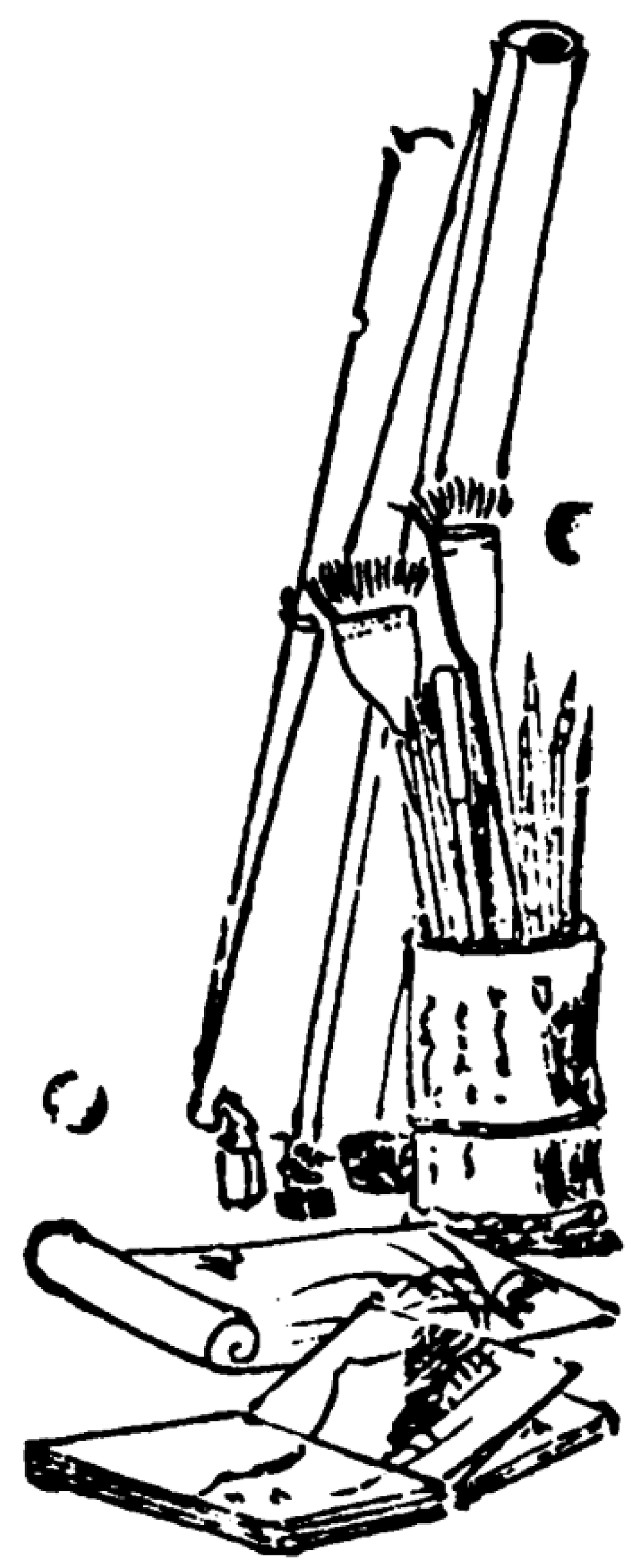
六日より郵便切手貯金を實施する事となり、來る二十五日迄には、省令を以て取扱手續を發布する筈なり、其の切手貯金に用ふる臺紙は、西洋紙迄にて二ッ折となし、内面の右方に切手二十枚を貼布すべき罫欄を設け、左方に貯金預け入心得を載せ、表紙には勤儉貯蓄に關する面白き三遍摺りの表書を畫き、其の二つに折疊みたる廣さを、貯金通帳と同一ならしむる筈なりと、而して切手金額の十錢に達したる時は、之を郵便局所に持參し、通帳に轉記を受くると同時に、其の臺紙を郵便局所に返附せしむる手續にして、其の臺紙の注意は、暗に貯金奬勵の方便ともなるものなれば、可成、其の體裁を美麗ならしむる筈なりと。

●師弟の緣は違約より切れたる事　謠には緣ある猿樂町に去年の春營へたる舞臺に打鳴す皷の音冴ゑて、朗々たる謠の聲、近く聞けば流泉の巖に咽ぶが如く、遠く聞けば遙に濤聲の寄せ來る其にも似通ひて洩れ聞ゆるは主松本金太郎氏とて寶生流の名人、謠は言ふも更なり、舞に神品の妙ありて嗜める酒を被むりて夢ともなく現ともなく舞臺に登れば、ひら〳〵と飜へす袂に雲起り、ひらめかす扇に雨をも呼ぶべし。やんごとなき邊りに出入すれご曾て膝を權門に屈するを好まず、年老ひたれご昔しの元氣失せず、磊落不羈なる天性は自からなる名手の骨を具へたるか、弟子の一人に建物會社員某と云ふが有りて、此程漸く謠聲の咽喉吹ききれて熊野の一曲も節だけは謠ひ覺ゑたる程なるが、知れる人に日鐵會社員某氏の邸にて、此程謠の會の催しあるに、己も招かれて參列すべきのよし約しおけるが、日鐵(假に略して)は建物の此頃に謠振の豪しき進歩に、これ師匠の仕込其の宜しきを得たるによれり、己も其の師なる松本氏に會ひたく思ふ折から、會の當日は師弟の緣をもて是非々々拙宅へ招ぎ給へ、麁略には待遇さじとありけるに、日鐵は然らば一應師に請ふべしと直ちに其旨師に聞ゑて、強つてもお出下されたしといへば、それは謠の會となれば何方へも行きますけれど、知らぬ方へは心進まず、君が會の時刻に先づ出席して案内し主に紹介さんとならば參るべしと諾ひければ、日鐵は千萬忝けなしと、其日は時刻を諜合して別れけり。會の日ともなりぬれば、堅氣の松本氏は刻を違へず日鐵先生の邸に至り、建物會社員某は來てをりますかと問へば、未なれごお通り下さるべし、能くこそと皆々當日の珍客と上座に据ゑけるが、軈て人々は大方集りてポツ〳〵取出す皷太皷、お囃謠ひの聲は交々起りて、梁の塵も動かず、雲も脚を逗むべく見ゑける。一曲果

ても、例の日鐵先生未だ來らず。松本氏は未識の人なれば、早く弟子の來よかし、何とぞ夫れ來ること遲きやと心待に待てる効もなく、刻は次第に移りて酬酢の後も猶子は出席せざりけり。詮方なく愈よ來ぬに決めて、よき程に座敷を切りあげて歸りしが、平生係る事は大嫌ひの質とて約を違へたる日鐵の無禮を怒ること太甚しく、翌朝直に文認めて詰責の言を盡しやれば、其夜ごろ日鐵よりお詫の返辭來けて、實は那の日は昨日來より謠の演習に悉皆咽喉を潰し、席に列なるに効なき嗄れ〳〵の哀れさ、謠へ〳〵と責めらるゝ時の苦しさを想ひて、心惡くも違約の罪はお赦し下されかしとの願紙一片に、さらば其由傳ふべきを然とは心なき爲打と、師弟の緣も其限りとぞなりける。

●日本海員の義勇　去一日米國より橫濱へ入港したる東洋汽船會社香港丸が齎したる報知に據れば、同船が先般橫濱より米國に向ふ途中、始終風波荒く去十二月廿四日、布哇近海に於て、風波の爲め、同船斜檣の綱綴み、水夫五名は、何れも斜檣の上に跨り、其の綱を緊め居る際、山の如き怒濤は斜檣の上に打掛けしかば、其の一人一等水夫東谷孫市なるもの丶影見えねば、正しく激浪に洗れたるものなりと、同船は、忽ち機關の運轉を止め、水夫長石田武右衞門、水夫次長秋元秀雄、一等水夫都田仲吉、永井早藏、堀内森、坂本粂太郎、二等水夫大西喜三郎の七名を選み、別に同船日本海員の首座たる二等運轉士白根小作氏自ら進んで、指揮長となり、船尾の短艇を卸して之に乘込み、一同死を決して、怒濤の中に漕出すや否や、忽ち短艇は怒濤の爲め本船より二三十間も洗ひ流されしも、一同勇氣を鼓して怒濤を乘り凌ぎつゝ、凡五十分間も東谷の身體を搜索せしが、何分風浪荒くして見當らざれば、一同は疲れ果てゝ短艇を本船に漕ぎ寄せ、何れも綱に縋りて本船に乘り移る一刹那短艇は、本船に觸れて粉碎せられたりと。同船の船客等は、水夫等の勇敢なるに感じ、又溺死者追弔遺族慈惠の爲、義捐金を募りしに其の人數僅十四人の少きに、金額は忽ち三百八十餘圓の

多きに達し、同乘組員、在桑港、日本人、東洋滊船會社等よりの義捐金を加へ、總額五百餘圓を得ば、其の遺族に送りたりと、猶桑港にては、乘客の報告を得て、諸新聞の水夫等を賞賛する者、甚しく、又、其の乘組員の慰勞として、船客中より七十五圓を義捐せりといふ。



◉女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。

一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題

住所　姓名

…………………………
…………………………
…………………………
…………………………

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

題

住所　姓名

……、……、……。……
……。……、……、……。
……、……、……。
……、……、……。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、片假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總べて沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。



教の庭

二月廿日兼題　江上霞

天　三河國八名郡賀茂随園社中　三宅中枝子

いなさ江や氣賀にゆきゝの舟のみは
ほのかにみえてかすむはるかな

地　大隅國肝屬郡鹿屋村下谷　山田稲子

ところ得てたづのあされる住の江の
なみをへだてゝかすみたなびく

人　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

あしのめのもえ初しよりくさか江の
なみもけぶりてたつかすみかな

人　松山市西堀端町　重原はる子

けふもまたいり江かすみてゆく舟の
ほかけもみえずなりにけるかな

人　東京日本橋區蠣殻町三丁目十二番地　香波愛子

うすくこくおぼろにかすむ末きえて
はるかにみゆるあまのつりふね

（以下原稿到着順）

住の江のきしのひめまつ千代のはる
みどりふかむるやへがすみかな　坂本遊多歌子

吹風のおさものさかにはるくれは
入江のなみそうち霞みける　田村多豆子

水の色に春なもこめてみしま江の
きしへのさかに立ちかすみかな　村上操子

みつ鳥のこゑはかりしてかすむなり
なにはほり江の春のゆふくれ　山根久子

かすみたつ春のながめのすみの江は
うつし絵よりもうろはしきかな　稲津千子

山のかげうつらぬまでにうらうらさ
しほのいり江にかすみたなびく　友永章子

あら玉のさしたちぬればみしま江の
なみもひさつにかすみたなびく　筑紫春子

月かげものこりてにほふあさぼらけ
たちつくり江にかすみたなびく　吉富彦子

梅かをり今朝ふくかぜはさむけれど
すまのいり江はかすみたなびく　高宮謙子

初かすみたてるみそらに日のみはた
さもになびけりなにはほり江に　那須昌子

入江こぐふねのすがたはみねれども　中山庫子

難波江のよしなあしさもわかぬまで
おさはかすみにかくれざりけり　村上昌子

はし立やよさのいり江のなみさほく
たちかくしたるはろかすみかな　村崎包子

八代のみれはみゆきのきはなくに
うらく〵かけてかすみたなひく　梁田明子

春のそら日かげおぼろにかすめども
かゞみのいり江うちかすみけり　佐々木忍子

川島江やたま江のきしにあなやぎの
たつなみしろしすみの江のおき　佐々小琴子

入江こぐたななし小ふれほのほのさ
けふろさみはてかすみたなひく　佐々有鄰子

住の江のしほひのかたはなさめこが
かすみにしづむはろのあけほの　溝口貞子

入江こぐふれはかすみにうづもれて
こゑもかすみてなびくそでかな　受樂院圓子

うらく〵さたちそはにけり春かすみ
かぢのおさのみきこはけるかな　高やす子

うらく〵さかすむ入江のあさほらけ
いりはこぐ舟のみはわかぬまで　玉井隆子

あくたたくけふりも添ひて三島江の
こきゆく舟も見はわかぬかな　道廣やゑ子

見渡せばやへのかすみのたちこめて
たま江のいりはかすみこめたり　南里さた子

さほ姫のかすみのころもうすければ
みどりのかげも見えぬ住の江　國枝すゞ子

おほろに見ゆるおきつしまかな

かすみたつ伊勢の入江なうち見れば
海士の小ぶれの見はつかくれつ　鋭沛よさ子

こきわたる舟もなかはゝかくろひて
まゝのいり江はゆふかすみたつ　田村道子

見わたしのみつの入江のたまやなぎ
なひくさ見しは霞なりけり　仁保しま子

なにはかた入江の小ふれほのみはて
はやたちわたろうすかすみかな　金森さし子

かゝみなすいり江の水もけふよりは
かすみにうかぶこゝ地こそすれ　木村菊子

舟つなくいり江のまつもこのころは
みはわかぬまてかすみたなひく　田代喜和子

住の江やみきはのあしのふしのまも
はるにおくれすかすみたなひく　田代艶子

はろかすみたなひきわたろ難波江や
よしあしさもに見はわかぬまで　田代綾子

霞みつゝそれさわかれさのりさりの
うらこもり江にこゑそ聞ゆる　石川久子

のさけくもいり江の芦のもはいづる
けふりさ見しはかすみなりけり　石川田鶴子

貝ひろふ子らかあそべろあさき江も
ふかくかすみのたなびきにけり　石川敦子

春なれや入江のかせはさむくさも
そらはのさかにかすみたなひく　石川南江子

まほあげて入江さしくさわかれさも
かすみなもろゝふなひさのこゑ　石川樂子

なには江につのくむ芦もみはそめて　河田いし子

なみぢのさかにたつかすみかな

舟人のこゑはまちかくきこゆれど
かすみて見えぬ住の江のうら　尾倉釜子

春かぜにたちこめてけり八重かすみ
いりえのふねの見えわかぬまで　田山芳子

遠つおほみ引佐ほそ江のほそぼそと
はるのしるしにかすみたなびく　名取正代子

あしの葉のさやぎもたえて難波がた
いり江のさかにやすみたなびく　名取よし子

しかの浦のこほりのあさにたつ浪も
みえわかぬまでかすみたなびく　萩原章子

和歌のうらいり江のきしの夕かすみ
たなびくいろにはるはみえけり　小川初子

なには江のいり江の芦も見えぬまで
ふかくもかすむなみのうへかな　福原菫子

流れ江もかすみによさむ心地して
みづのおささへのさかなりけり　財田富子

なにごとをおもひ入江のゆふかすみ
はれずはつきのかげもやさらし　横山柳子

むさしのうみ入江の浪もにほふまで
けさはかすみのたちわたりけり　横山すが子

よる波のおささへたえてなには江や
はる日うらうらにかすみたちけり　徳永萬壽子

こぐ舟もほのぼのみえてすみの江や
きしのまつが枝かすみこめけり　徳永廣子

舟ひさのこゑもまちかくきこゆなり
かすみのおくやいり江なるらん　小森田輝子

ほのぼのとかすみわたりて漕いづる
いり江のふねも今朝はみゆらん　小森田初子

ふりさけてみればかすみのたな引て
なにはほり江にこぐふねもなし　澤田春子

春のそらなにはほり江はかすみ籠て
あまのとまやも今朝はめづらし　澤田十萬里子

もえいでし芦のわか葉のはるあさく
かすみにけりな難波江のうら　小野操子

汐かぜになびくかすみのひまもれて
入江のまつにふねつなぐみゆ　鵜澤千代子

玉の江のみつかみさほくうらうらと
そらをおほひてかすみたなびく　山田き代子

ふな歌のふしもおぼろにきこゆなり
たま江のきしのかすみこむれば　東野ごく子

うらうらとかすみ棚びくなには江や
きしうつなみもけふりこめたり　竹村貞子

こぐふねの音はきこえておほくらの
いり江のさかにかすみたなびく　西川順子

あしのはの若ばもいまだもえなくに
はやかすみたり難波江のうら　清河照子

和歌のうらやあまの漁火ほのきえて
かすみたなびくたまつしまやま　松本まさ子

ほのぼのと明はなれゆくすみの江の
かすみにきゆるしら帆三つ四つ　前田飛佐能子

すみの江のしほかぜたえし夕なぎに
かすみをのせてかへるうらふね　屋舗すゞゑ子

舟は消え帆はあらはれて氷見の江の　伏脇米子

なみ路のとかにかすむはるかな

やましろのみつのいり江の玉やなき
かすみのそでにつゝむあけぼの　松島きみ子

はせてゆくくるまのけふり末なびき
はま名のいり江かすみそめけり　齋藤かつ子

春かぜにこほりはとけしなこの江を
ふたゝびさすあさかすみかな　齋藤よし子

もしほやくけむりもたえて三島江の
いりえとほくもうちかすみつゝ　池江榮子

三島江のいりえとほくもはるかすみ
たなびきわたる今日のゝどけさ　池江もと子

みなと江にうかぶ小舟も見えぬまで
たなびきそめしはるかすみかな　宮原さと子

汐けふりたちやそふらんみなと江に
けふはかすみのふかくたなびく　高橋かれ子

みなと江の波にうたひてかへるなり
こきいるふねはかすみかくれに　高橋よれ子

水とりのこゑばかりしてすみの江の
みぎはもかすむはるのあけぼの　草野とめ子

打ちよする浪もしづけき志賀のうら
かすみがくれに見ゆるつりふね　富瀬八重子

久かたのそらものとかになりにけり
ゐり江にかすみたちそめしより　佐藤やす子

おしなへてかすむみそらの住の江は
ひとのこゝろものとかなるらん　佐藤柳子

いつる日の影のとかなりすみの江の
みそらのかすみけさやたなびく　佐藤數子

住の江のまつのこずゑもうらゝかに
かすみのしたをすくるはるかぜ　木村きく子

春されはあし吹くかぜもおとたえて
入江のとかにかすみたなびく　八木沼里子

をう〳〵と舟よぶおとのきこゆれど
かすみにくれてわかのうらなみ　根田よし子

大井川ゆく瀬もわかすかすみけり
なかるゝみつのおとはかりして　山方春子

和田のはら浪路はるかに見わたせは
かすみにうかぶあまのつりふね　大塚小松子

深き江にとちしこほりもうちとけて
なみよりさきにたつかすみかな　片山あや子

春ふかみまのゝいり江にみづとりの
ゆくゑも見えずかすみたつなり　宮内とし子

うすくこくまのゝ入江にあさかすみ
ゆきかふふねもこきそわつらふ　川村幸子

難波江やみほのしるしもわかぬまで
かすみこめたるなみのうへかな　内田とく子

はるかぜものとかに吹て三島江や
さはかぬなみにかすみたつ見ゆ　諸井くら子

難波江やあしのめさしもわかぬまで
なへて霞めるなみのうへかな　舘脇ます子

玉もかるたまえのあまのそでの上に
たちそふものはかすみなりけり　戸塚てつ子

難波江のなみもかすみてきしへなる
ふねもおぼろに見ゆるあさかな　富田けい子

こぎつれて春もいり江のあさがすみ　吾妻ちか子

なみもろともに立ちわくろかな

ふれきそふ入江の波に立ちわたる
かすみそはるのすかたなりける　杉浦いさ子

難江やかれたるあしもつのくみて
ひまなくかすむなみのゝとけさ　鳥飼つる子

見わたせばゆく瀬も分ずかすみけり
けぶりたなびくすたのかはつら　早川樹子

梅か香たしなりにわたるしはふれの
かすみわけゆくにほのうなはら　辻さみ子

水けふる入江のあしの見えぬまて
かすみたなひく春のあけほの　萩原ろく子

白帆のみほの〲見えてなには江に
こゝろふかくもたつかすみかな　三木壽子

春かすみふかくたなひくなには江は
わたるふなひとみちまよふらん　三木まさ子

かちおろす音ものとかに三しま江の
たま江にかすむあまのつりふね　高砂き代子

もしほやく苫屋もきえてなにはかた
いり江のとかにかすむはるかな　高砂清子

おほ井川けむれるみつのすえきえて
いり江になひく夕かすみかな　高砂菊代子

みなと江によりくる舟もかけきえて
かすみにしつむこのゆふへかな　高砂静子

つりをふれ入江はるかにこきいてゝ
かすみにまよふあさほらけかな　上田緑子

うら〱といり江のまこも打けふり
かすみたなひくあさほらけかな　永山登子

難波江やけさたち初めしかすみにて
すむみつごりもはるをしろらん　井上つさを子

くれそめて川づらとほきはるかすみ
帆は見えなくにさほの音ぞする　村山てる子

よるなみのおとものとけき住の江に
まつのいろこくたつかすみかな　梯たけ子

なには江の芦間に見ゆるいそふれも
かすみかくるゝ春のあけほの　中村まさ子

まつしまや入江にかすみたなひきて
かすかにきこゆ海士のふなうた　齋藤はる子

かみわけこぐま帆の先き見えそめて
やがて消えゆく三島江のさゝ　村田吉代子

草も木もまだ春しらぬあしたより
早くもかすむなにはほりの江　上原八重子

うす霞み立ちそめにけり春といへと
こほりはふゆのまゝのいりのえ　櫻井和香子

住の江のまつのあらしのおとたえて
かすみにうつむおきのしらなみ　馬場梅尾子

こく舟のほかけもけさは見えぬまて
いり江のかすみふかくもあるかな　久松誠子

住の江のうらによるなみおとたえて
かすみこめたるはるの夜のつき　米窪鼎子

にごり江に遊ふかもめもおぼろなり
たなびくかすみいやふかくして　丸木靜江子

難波江やしほせくまなくはるみちて　福原文子

すみの江の濱路はるかに見わたせは
かすみてつゝむ四方のしまじま　武田桑子

みづきよきたま江によする波のほの
かすみに消ゆるあまのつりふれ　鈴木安賀子

むこの浦もみ面のやまもわかぬまて
ほのかにかすむあまのつりふれ　戸倉信子

こめおきし松さへ見えすみの江の
かすみこめたりなにはいり江に　藤村幾子

うらうらとかすみのあみをほしてけり
かすみにまよふあまのつりふれ　熊谷文子

難波かた入江ほりえもわかぬまて
なにはほり江のはるのあさかけ　青木たま子

住の江のまつのあらしもしづまりて
たちわたしたる谷霞かな　澤井英子

山の端の松にゆふひのかけおちて
かすみにくるゝなみのいろ哉　澤井かし子

あさかすみ岸のやなきをたちこめて
なみちほのかにたつかすみかな　伊藤いく子

たつか音も霞のおさにきこゆなり
しほのいり江にもゝちさりなく　境野愛子

いさり舟いり江のおものわかぬまで
たまつしま江のはるのあけほの　河原芳子

立つゝく柳のけふりもそはるらん
かすみなからにくるゝころかな　天野ちかを子

あしたつものさかなる世の春しらん
はるはるかすむみしまへのささ　藤井りゑ子

なにはいり江のかすむゆふへに

みしま江や玉江のあしになみこえて
かすむなかれにはるそうかへる　河野みち子

ほのほのと霞みこめたるなには江の
あしの葉分のかぜしづかなり　田海順子

千鳥なくおきのたしまをながむれば
けさはかすみにかくれけるけな　寺崎みさ子

芦かひのもゆるさかりさなりぬらむ
かすみけふれりなにはえのそら　河合縫子

まつかせもなみもしづけき住の江の
ふかくもかすむはるのあけほの　加藤數子

ふしのねのなかめはたえて春ふかく
みほのいりえそかすみわたれる　服部萬子

はるたちてけふ三日の日に見渡せば
いなさほそえはかすみそめけり　服部正子

まつのはのみさりをこらて大ゐかは
いり江ふかくもかすむはるかな　伊東千代子

はなのさくほさもあらしも山かけて
いりえかすめるおほゐかはかな　伊東以左子

すまのうら釣するあまのこえはして
すがたは見えぬはるかすみかな　外川金子

水さりのさもよひかはすこゑはして
のさけきまゝにかすむなには江　田中さみ子

きのふけふゆきかふ海士のつり船も
みわかぬまでにかすむなには江　黒子玉枝子

あさぼらけ波しづかなるなにわ江の
きしにたなびくはるかすみかな　粟田口のぶ子

うちはれてさわくかもめの羽音ごさ　鈴木まつ子

うすくこくたつはるがすみかな

難波江のあしまにこゑはきこゆれど
かすみに船の見えわかぬかな　濱野時子

かすみたつ春の川邊のわたしもり
花にうかれていづちゆきけん　吉田まさゑ子

すみよしのほり江の松にすむたづの
かげもおぼろにかすみそめたり　梅本ふさゑ子

いそちかきかもめも見えて三津江や
春日うらゝにたつがすみかな　小村隱子

おほゐ川いり江をさして行くふねの
ほかげのどかにたつかすみかな　佐々啟子

春もやゝのどかになりぬあけの
つきのいり江にかすみ立ちけり　牧絲子

なには江やこぎゆく舟の行くゑまで
かすみてみゆるみづのおもかな　牛澤千代子

二月廿日兼題　名所の寫眞を贈るに添ふる文

天　三重縣度會郡宇治中之切町　原　芳子

九重の花の都の景色を見飽きたまへる君には、なかなかに、天さがる鄙のながめもおもしろからむと、近きわたりのうつし繪、二ひら三ひらすゝめまゐらす。うつし繪の業の、つたなくみぐるしきはゆるさせたまひ、たゞ、その神代ながらに動きなき神の都のありさまを、みそなはし咲ひたまひてよ。その中の、花の白雲たなびきわたれるは、宮川堤の櫻、濱遊の月は二見浦の夏の夜、大船小船のゐならぶは神社港、いかめしき大伽藍のそびえつるは、朝熊嶽の金剛證寺、大なる橋あるは、これぞ名高き宇治橋の綱受になん。杉のむら立かう〱しう、太柱太敷たてゝ、千木高かりますは、いともかしこき内外の宮の大御殿をうつしたてまつりしたふときものにこそあれ。朝な夕なに、打ち向ひおろがみまつりたまはむよすがにもと、そへはべりてなん。あなかしこ。

地　山口縣都濃郡末武下村　村上操子

ことしはなにの幸にかありけむ。のどけき春の彌生の頃、かねて聞きわたりつる、花の名におふ、芳野はつせとおもひたちて、西の京はあらし山よりかけて出立侍りぬ。其の山のたゞずまひ、其の花のあはれさは、處によりて變り侍れど、ふかくも書の林にわけいらぬ身に、とり出てをかしく、歌によみうるはしく文にかきいづへうもあらず。されど、天下の名所を匂ひなくなしはてむも心なき

わざなれば、後の世のおもひ出にと、其の處々にて寫眞を買取りたれど、御心なくさにおくり申になむ。また、おもひいで賜ふゝしもやあらむとてのすさひになむ。かしこ。

人

信濃國諏訪郡上諏訪町湯脇方　久保玄ゆん子

都なる兄の許より親しき友垣にもおくりまゐらせよといふ。寫眞あまたおくりおこせ侍り。まだふみも見ぬ天橋立、嵐山、龍田川、須磨、明石なんど、いづれといはず、歌文の上のみにて、おもひなしては、たゞ、とやあらむかくやあらむと、あだかも空に築けるたかどのなれば、かねておもへるには、いみじうさまかはりて見ゆかし。珍しからぬが多かめれど、さすがにまた、すてがたくなむ侍り。あだなるわざならじとうしろめたはもおもゆれど、かつは、兄の言の葉もそむきがたく、まづ、君におくりまゐらするなり。深く三十文字あまりひと文字に心を寄せたまへる君が、古にもまさりて、よみいでたまはんには、寫眞も中々にはえあるこゝちや爲はべらなむ。かしこ。

(以下原稿到着順)

佐々有鄰子

庚子の年の、今日は正月の朔日の日に侍れは、心あひの友達二人三人ともなひて、名にしおふ芦北の野坂の浦に舟こぎうかべて、かすみ立沖のけしきをながめやり侍れば、實に萬葉集の歌にあしきたの野坂の浦云々と詠出られし景色の、波にうかび侍れば、輕便の寫眞器をたづさへし人の侍りしかば、其人のうつされしを、一枚こひねてわが片田舎は、舊暦をのみ墨守して、本暦は夢にも用ひぬ里なれば、都の學のはらからの君に、年始の御笑種にまゐらす・同し學校のむかしわすれし遣さな見すてたまひて。あなかしこ。

年たちて三十日あまりになりぬれば
田舎の正月しるやしらずや

友永章子

拜啓、妾等御蔭を以て昨夜歸宅仕候。今回の旅行は、汽車人力車なしからずして、長崎、佐世保、伊萬里を經て、博多、箱崎にいで、佐賀にとまり申候。同行の人々は、山川の姉さ、大路の妹さ、妾ともに三名つれにして、大に愉快をおぼえ申候。御令妹樣に、何か土産の品をと道すがら考候へども、贈呈の騎にのりし恐さて、おもふまゝにもならず、此段御さつし下されたく候。いさゝかしるしまで、別他の千代松原の風景、大宰府神社、長崎港、佐賀古城等の寫眞を御贈り申候。御笑納被下度候。是は輕便寫眞器にて、妾等三人かたみに寫とり候。不手際のものに御座候はゞ、御用捨可被下候。例ぞそ、土地の風俗、名所の風景等の御ものがたり申上度候。夕方より、御令妹樣御一所に御來車奉待上候。いつもながらのねせ歌、御目にかけ申候かしこ。

道すがら手すさびにせしうつし畫を
きみにおくるも紀念なりけり

玉枝すゞ子

御さほく〳〵敷おすぎ申候。この程より、京都なる伯母の許より庚

度のすゝめに任せ、父母ともぐ\かの地へと門出致し候ひしに、父の數寄とて、其のわたりの名所古跡ども、且とひ且ながめ、月日のつもるも知らで一月ばかりを過し、やうく\今日歸り見れば、花にて別れし庭の木々もちりはてゝ、見るかげもなく、心あるは恨みやすらむと思ふばかりにあれはて候。さても、この地へ參りし頃は、花のまさかりにて、かれて思ひ居しよりは、一きはすぐれてめづらしく賑やしく相覺ゑ申候。又四方の山々柳さくらをこきまぜて春の錦を織りなし、紅なる霞のたなびき渡りたる様、得も言はれぬ。筆にもゑにもつくせぬ風情にて之あり候。又もろ〱の精舍佛閣を經めぐり、珍らしき寶物をも見つゝ、こゝかしこさまよひ、身は恰もゑの中に遊びし心地致し候。君のこの行に加はり給はば、又一層樂しかりけん。それのみ父母ともぐ\くやしみあるき候。さればや、せめてはうつしゑなりとも御目にかけ、この地の事情知らせまゐらせばやと存し、所々にておかなひ歸り申候。何れ近々の内參上致し、よろづ、かの地の模様御話し申べく候へど、先は取敢ず、かの地の名所の寫眞別封として御送り申上候間、御覧下され度候。あなかしこ。

田山芳子

この頃は、深山の雪も消ゑそめて、河面に渡る薄霞、野邊の若菜ものさやかに萌ゑいで、一きは心も浮きたつ景色に相成候。御前様、何時もなから、すこやかに學びの庭にあらせらるゝこそ、嬉しく芽出度けれ。妾もさしたる異様なきまゝ御よろこび被下度候。この程の都のけしき、いかばかり、わきて墨堤の雪龜戸の梅は一しほの眺めならむと羨やみ居り候。妾も、都にありし時御前様春子さま夏子さまらと、手をとりて學びの園の暇には、上野の花に、瀧野の紅葉をと、睦みし袖をこぞの春の始めよりあまさかる八重の鹽路に埋もれて、又見んすべもあら涙にぬれにぞぬれし色は變られば、都の空のみ眺めつゝ居り候。さりながら、御前様の深き慈みもて四時をりく\の都のさま、御知らせたまはる水莖の跡の、かへすく\も嬉しなんと譬へんものなく、さながら、集ひる心地してなつかしく、いとゞ昔の忍ばれ候。さいつ頃十日あまりひと日、いとうれしさにまぎれいで、このあたり近き大洗の社に、友垣ふたりばかりと、雲にそびゆる高千穗のかた遙拜しに草も木もなびきふしけん大御代を仰くけふこそとたのしみつゝ、關守る神にあられとも、又逢坂もあら磯前とをろがみぬ。御崎近くもさまよへは、大海原に立つ浪もいと穩かに、梢ふく御山の風も音なくて、君が八千代を祝ふらむ。天津日つきの高みくらいはほの如く動かぬを、いはふなぎさの濱千鳥空に舞ひつゝ謡ふさま筆の及はゞ繪に書きて都の人に知らせましと思ふも、かひなければ、側への丘の苫屋に到り、このあたりの様寫したるものもとめ來しまゝ、文箱の底の塵までに送るになん。徒然の折にも御覽じ玉らば、磯のあはびの身にあまるかひあれと、あだなる海のもくずをと御さげすみ玉ふまじと存候。御前様彌生の試驗芽出度すまし、やがて葉月のやすみには、箱根大磯ふりすてゝ、暑さを避けて此邊に海士の小舟は庭のごとうしほの湯壺もある程に、是非御出ましあられんことを、まつほの浦にこがれつゝ居り候。末ながら、啓子さま夏子さまにも、御たつ聲聞ゑ結はれかし。あなかしこ。

德永霞子

此のころのさむさ、四方の山にふりつもる雪のけしき、いかにながめさせたまふらん。其の後は、音つれもたゑ侍れば、心なき者さいからせたまはんと朝夕心やすからず侍り。妾もことなう月なおくり侍れば、御心やすく思召たまひてよ。さて、此寫眞は、都の友よりおくりこし侍れば、獨ながめんもいとほいなう思ひ侍り

て、名にしおふ須磨明石の趺、壹枚は、嵐山の花のけしきなり。諸人の歌よみかはす名所にあれば、文机のもさの御心やりに、ながめさせたまひてよ。あなかしこ。

小野操子

春さは云へご、きさらぎの尙さむかへる寒さいみじければにや、例は、先昔信るさ云ふ谷間の鶯、未だ來鳴ぬ此宿のそぶ〳〵しさ、昨日も今日もかきこもり、すびつに心引れ候。折しもあれ、東の都なる花子の君の御許より、歸りはへての玉章に、都には、野にも岡もに花咲て、一日〳〵に春の色深う、垣根の若なはやも摘べくなりにけるを、近きに物しつる寫眞もて知り給ひねさ、此所彼所取集め賜はりたるは彼の初音よりげに珍らしう、是彼取出で見るからに、いづれ懷かしふ床しからぬはなけれご、分て心さまりて目がれぬは、龜井戸梅園の樣にぞあなる。さるは、一年學びのいさま、師の君の御供して彼庭の花の下蔭に打きよふじぬる樂しさを、君にも得こそ忘れ給はざらめ。今はた思ひ出るだにさながらなるを、一人して眺んもあらず本意なう覺ゆれば、半は分ち參らす。いかで昔忘れぬ紀念にさ、同じ心に見そなはし給ひなばいさいさゞ嬉しうなん。あなかしこ。

山田き代子

まがきに殘る雪の色、小田にたゝずむ白さぎも、まだいささむげなる昨日今日、いかにすぐさせ給ふらん。其の後はうちたゆて心外の御無音、平にゆるさせ給へかし。さて妾の父君には、去年やよひ公用にて京に出張し給ひしが、ある寫眞師に命じて、名所をこさごさくうつさしめ、此度家づさにもちかへり給ひぬ。されは君にはかゝる處をいさめでさせ給へば、此の寫眞、朝夕御らんせさせ給ひてよ。さすれば、妾もいかばかりかうれしうなん。あなかしこ。

西川順子

かれて、諸共にさ、ちぎり參りしを、姉の君久々にて都より歸らせ玉ひ、又ほごなく上らせ玉ふさて、得行きたまはざりし事の、いさ殘りをしく侍るよ。いかで、君さ共にさ思へりしも、折角思ひたちぬるを、又いかなる障りの出來んもはかりがたければさ、そそのかされて、いにし五日の朝霞さ共に立ち出で侍り。松子の君も、俄に障ることのおはして、もれ玉ひしも、なほ妾の外に三人の同行者ありしため、道の程も淋しからず、豫定の如く各地に遊びて昨日恙なく歸り侍りぬ。百聞は一見にしかずさかいへる言の葉の如く、かれて聞きつる所も、まのあたりに見れば、又さされるふしも侍り。ことに、桓武の帝以來久しく帝都たりし地さて、古跡も多く、歷史上の知識を得し事も少なからぬものから、君がこの行にもれ玉ひし事の、いさも〳〵のこりをしさに、せめては、このうつし畫にてもさておくりまゐらす。妾が心に感じたるこさゞも、なめげながら、それ〳〵うらに記しおき侍りしを、さるかたに許し玉ひてよ。よろづは、近きうちまうのぼりてこそ。あなかしこ。

屋舗鈴枝子

百聞一見にしかずさかや。文章にも勝りて、空間に廣く、時間に深く、傳ふべきは寫眞ならん。さるは、遠く住み給ふ人の、普く知り、幾末々の後の人の、遠き昔を知ればなり。別封にて參らせたる、一葉は義經公の腰掛し岩、今一葉は布施の淵なりし圓山になん。共に我鄕にて名たゝる所、見やすらん爲さて、そこら概略の地圖、將た歷史に關はることなど、裏面に、刷物さして貼り置きたれは、それ照し合し、今の樣を御覽じて、有し昔を忍び、さて後の人の、今を忍ぶよすがさもし給へれかし。あなかしこ。

伏脇米子

今仕上たりとて、送り來しを取あへず、別封にて一葉參らするになん。立別れ給ひてより、玉數の部にのみ住み給へは、天ざかる鄙の面影、やうやう忘れ行き給ふらんと思へど、さりとて生ひ立ち給ひし故郷なれば、御覽ずる即て、心は有し昔に返り、言ばでもそれよと知り給ふらん。おぼし出せ、春は御母君に連られ、秋は我が姉上などその かして、共に遊びし布施の圓山よ。家持卿の御影のみ社は、滑なる昔の上、さこしへに神さび立てれど、あたりの景色は遷り行世に伴ひつゝ、いよいよ昔の面影絕ね行くよ。千百年の昔語りがに見ねて、物ふり立ちし老松も、或は朽ち或は朽れて、跡となり土塊と變り行事のあたらしく、此末いかに面かはり、行らんとて、これかれに謀りて、寫眞師に物せしめつる也。見玉へ、此山、今は田中にあればこそ、湖中に浮ひし昔、いかに山水のけはひをかしかりけん。そのかみ、卿が遊びの舟を、いづこに漕ぎ寄せ給ひけん。かく昔を今に忍ぶが如、後の人も今を昔として、其面影を忍ふらんとて也。扨も開け行大御代の有難さ、眞像を留る巧いで來て、枉の憂長く傳へ得ろことよ。送り來しやがて、留も早く捧げんものと、雲井の雁の走り書、列さへ亂れたるを添ふるになん。なめげの罪はさる方に、見許し玉ひてよ。あなかしこ。

富瀬八重子

硯の海も氷る斗りのこの頃の寒さ、如何御凌ぎ遊され候や。こゝ許一同かけりなく侍れば、御心安く願上候。さて、いつぞや御約束いたし候箱根溫泉行きのこと、一日千秋の思ひにて待ちし甲斐もなく、御許様には思ひかけなき御用事のいでませし由にて、思ひ止まられ候ことの、いと口惜く侍れば、姿も思ひ止まり、又よきなりを待んと思ひ定めしも、父母の仰せ、祖母様のすゝめの背きがたく、いにし某日箱地に罷り越し候へ共、知らぬ旅路の空さて、語らふ人は只祖母様より外には無之、いとどとど徒然にたへかね候故、今日しも近きあたりなものせんと立ち出て申候處、或る小店にいろいろの寫眞など賣り居り候へは、立ち寄り申候處、當地の名所など寫せしものも有之候間、家苞にもと思ひ立ち七八葉求め候まゝ、二葉ほど御送り申候間、御受取り下され度候。その中一葉は、箱根の關の跡より、逆不士を寫せしものにて、なかなかよく出來居候。今一葉は、箱根離宮をうつしゝにて候何れ、くはしきことは御目もじの時の話くさにもと、申殘し候。かへすがへすも、時候御いとひ下され度候。かしこ。

八木沼里子

雪は豐年の兆とか申侍れば、さまで忌むべきものならねど、本年は、なりかへしなりかへし降る大雪に、うづもれたる伏屋は、道ふみわけて訪ふ人もなく、いとどつれづれなるまゝ、寫眞帖くりひろげかれこれ見もて行くなりしも、一日もわすれがてなる なづかしき御身のかけは、笑ましげに我をばうちまもり玉へぬ。せめては、一言なりともものいひ玉はゞ、いかにうれしからましとおもふにつけ、過きつる年、同じ學び屋に、かたみにはげみはげまれつるころは、あるは信夫の山かげに、あるは名にあふもちすりに、袖うちつられあさりしも、其のたのしさを西東へたてしのちは、御したはしさいやまさり、いま御家にむかひては、いとゞ昔のしのばれて、いま一たびもがなとおもふなりしも、ふと當地の名所としおくもの、二三葉など見出しぬ。こは、南朝の忠臣結城宗廣ぬしのいさをゝめでゝ、斷崖にきざみし感忠銘の爵ある石文と、いにしへ白河の關所、なほ一葉は樂翁公の物し玉へる南湖と、この三葉をいま御身におくりまゐらす。その歷史は、かれて御物語せしこともあれは、こを見てしのび玉へてよ。さはいへ、かゝる一片の寫眞のみにては、あかぬ心地もし玉ふべし。されば、乞ひま

つるは、程なら春霞たち渡りて、鳥歌へ花笑ふころともなりなば、まげてさぶらひ玉へてよ。一々案内まゐらせ、實物もてくわしく說きあかし申侍らん。こは姿勢教のむちとるもの丶又なき方法ならん。まづ、ざれ言は兎にも角にも、おくりまゐらする寫眞を、あだにおもひ玉はで、やよひのころには、ぜひに〳〵さぶらひてよと願まつるになん。あなかしこ。

深尾千代子

日頃教を受けし中に、古への某公は何所の何神社にまつれりなど、あまたかいつられありしかば、なだたる名所舊跡を尋ねありくも樂しき事ならむと、思ひすぐし居候ひしが、いよ丶學年末休暇となりたれば、俄の思ひ立ちにて、去ぎにし日、家を出で候うて、やう〳〵今日午後二時過ぐる頃歸宅致し候。さて、めづらしからぬ品に候へども、名所寫眞二十葉御覽に入れ候、何れ其の內御目にかゝり、くはしく御談し申 へけれど、取あへずしやしんに添へてかくなん。あなかしこ。

田秀子

花さしいへばなべてあだなるを、とさり梅の花は、霜にかじけず、雪にうつろはず、冬深きころさゝ初めて、色香のさものにすぐれたるこそいとめでたけれ。まして、一歲の花の初めと思へばにや。いさゞみさまる心地して、春花のあまたが中にも、いみじうあはれふかゝり。扨、梅は都鄙山中のへだてなく、時しりがほに操正しきをあらわし侍ることなん。かゝることを、いひつゞけゆかむは、なかくをこたるべければ、さゞめてむ。皇國にても、一二をあらそふ梅の名所は、月がせさやらん申し侍り。其地の雪中の梅をうつし侍りし寫眞にて、操正しくあらわしおるを、わらは一人のみ見侍らむも、いとをしう思ひ侍れば、一二枚御許様に御らんぜさせ侍るになん。

高砂き代子

御望を渡る扇金の、そらたのめにはあらぬ御傾にて、描き筆のはしりがき、一しら聞へ參せ候。さて、いつにやありけん、某友のよせられしと聞く信濃名所寫眞集なる物、此の頃友垣より姿が元にも贈りこされ侍るに、姨捨山、木曽の掛橋、衣が崎、深志の城跡、淺間の牧など、景色勝れるを五拾枚撰らまれたるにて、なか〳〵におかしき物も見は侍るが、唯山中の名所なれば、杉田、隅田、待乳、上野、小金井、金澤など、都あたりの勝景には遠くおよぶべうもあられど、山里の景色うつしはてたはなりさおほゆるま丶、都の君にも一部呈し侍りぬ。若し當地に御遊覽こさせ玉はゞ、こまぐ〳〵御しるべ致し侍れど、先はうつし給もて、知るべ申し侍るになん。御笑ひにそなへ給へよ。かしこ。

村山てる子

北風いみじくふきすさび、雪もふりしきるに、御前様にはいかゞ日を送り給ふにか。おのれ、いつもながらすこやかになむ。そのなり丶御知らせ申しゝが、おのれ此の地に來しより、寒をもいとはで、日々におちこちの景色だもながめありくに、そゝろ故郷の友垣のこひしく、いかでこの美しき景色を示しまつらむ由もがなと、遂に寫眞をものすることゝさはなしぬ。そがうちに、五大堂のは、眞中にいかめしくたゝずめるは、五大神のしづまり給ふみやしろになむ。右なる橋は、いさくしき造りざまにて、梯子の如くなり。又瑞巖寺のについていはむに、ま中にある岩のうつるは、彼のなたる丶時頼の法をかたりて一夜を明せし所にて、其の傍なるは、觀世音を祭れる所なり。前にある石ぶみは、杉孫七郎ぬしのものし給ひしにて、此の寺の古事どもつばらに記したり。其の外の數枚には、各名を記しおき、一々記さむよしもなければ、煩をさけて略しぬ。なほ筆さしおかむも名殘をしけれども、先はかく

なむ。いつれ歸國の後、ゆる〳〵と話せむずるになむ。なほ又御前樣にも、御身を大切にせさせられ、すこやかに日を送り給へかし。かしこ。

中村まさ子

日にまし寒さを催し、枯木の落葉も地を埋め、埋穴のもと去り難く候折柄、今年も最早餘日もなく、暦の軸の顯はるゝは、いとも心細き事に御座候。實に過ぎ行く日影の早きこと流水の如しとかや。御分袂以來、既に一年の昔しとも相成候へ共、何の音づれも不致打過候處、あなた御許には、如何に御暮し成され候哉。妾も恙なくあだ日を消し暮し居候間、御安心下され度候。東著以來見るもの聞くもの皆珍しからぬには無之候へ共、何分未だあなたの如き親しき友垣とては一人もなく、夕方か又夜半となれば、故鄕にありて、共に山に遊び河邊に涼み、夕べに學びし其折を追想しては、常に淋しく暮し居申候。いづこも、全じく年の暮れにて目忙しきに、新玉の春も近より候處、今年は戀しき古鄕が許にて目出度齢を重れ申候に、明年は海山隔てし旅の空にて齢を重ぬる悲しさの堪へ兼候。只々學の早く終へて、古鄕の空に歸へる曉を待つのみにて候。其の後は、只に文のみにて古鄕の樣子都の事共の悲しさを語らへつゝ便りを文になし居り候處、今度此の都の名所と承る寫眞二十葉、買ひ求め申候により、差上候まゝ、いと最との好き名所を御覽じ成され、心に積る御鬱憂を御散らし遊され度候。先は取敢ず拙なる水莖につくし進らせ候。あなかしこ。

齋藤はる子

久しく音づれをたち、いとはづかしきことになん。此の頃は、やう〳〵長閑なる初春となり、つむ雪のまだ垣根に殘れる折柄、御許樣には如何に御在すらん。定めし御機嫌よう、此の道に御勵みのことゝなんをしはかり侍り。妾も、常の如くあたら日影を過し居ることなれば、御心休め下されたし。さて、妾兼て百聞は一見に如かずてふ言葉を耳にし、これを已が身にひきあて、いとはつかしく思ひ居り、いつしか暇を得て、世間の名所どもを見ばやと切に心に懸けつゝ居りしに、幸にも、去にし夏季休業の折を得て、いとよしとて兩三人の友と共に仙臺より、鹽釜松島かけて遊び、宮城野つゝじが岡青葉山、さては鹽釜神社、瑞巖寺、富山等の名所を探りしに、何れも〳〵いとめでたきに感じ、如何にもして、せめてこの綺譚たりとも見ぬ人に知らせばやと思ひ、歸るさ仙臺なる芭蕉辻の勸工場に立寄りしに、折しも此等の名所どもの寫眞ありければ、こは誠にめでたしとて、二組買ひ求め侍りき。それより、朝な夕なこれを見つ、さくらし侍り。日頃古聖の教訓に、獨り樂しむは衆と共に樂しむに如かずとの言葉をうけたまはり侍り。就ては一組さし上ぐるになん。つれ〳〵なる折などに御覽なされなば、妾のよろこびたぐふべき方なくなむ。寫眞に添へそのゆゑよしをかくは。あなかしこ。

村田吉代子

四方の山々、いつとなう春めきて、霞さへ細〳〵と野に麓に棚引き、若菜つむ小女らのあざる時節柄と相成候處、あなた樣には、定めし學びの間每に、そこここのけはひども御覽遊ばるゝ御事と存じ參らせ候。妾も、變りなう學びの窓につながれ居り候間、他ながら御心安かられんことを。妾さきつ頃、某寫眞師に乞ひ、名にしおふ信夫山の名所々々の寫眞求め來候處、げに面白く候まゝ、御手許樣へ參らせ候。この山は、我福島町を去る北の方十五町ばかり、野中に孤立いたすものから、遠く望めたらんには、山の中腹迄春霞の棚引き、恰も、あなた樣の日々御見遊さる金華山を見し心地してなん。數百の櫻滿開いたし候折、友と足を運びたらんには、何となくゆかしく、知らぬ吉野山ながら、かくやと思

はれてうれしくなん侍り。櫻花の白々と咲き亂れ、遙か彼方の方に社のほのかに見ゆるは、即ち彼の地にも斯る御社や鎭坐ましまし候やらむ。四季をりをりの候、學に倦み心悶う折には、早くも親しき友の九八子さんや字女子さん抔うちつられこの山へ散歩いたし、苦をはらし鬱を散じ日のくるゝをも知らぬ位に御座候。こゝに友の名ども書きつらね候は、あなた樣の、かねて離れ難き友なるよし承りし候故かくなん。數百年の昔ある公卿が信夫浦などと歌にうたはれしなりには、この山の周りは、皆水にてたゝへられ、いとけしきよかりしと老いたる人の言ひ傳ひに御座候。又有名なる河原左大臣とやらいふ歌人の「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに」など詠まれし、信夫もぢずりの出す所も、この山の近き村里にて御座候。其所の寫眞のうらに、此事どもくはしく書き添へ申上候間。御覽遊ばされ下さるべく候。かしこ。

天野ちかを子

折柄とは申ながら、日々に寒さもうすらぎゆき、何となく心も春めく頃ほひ君には御障りもなく、いよいよおく深く文の林をわけ入給ふよし、陰ながら、いとも嬉しうなん。扨てきのふは日曜日とて、暇あるにまかせ、父にともなはれ月ヶ瀬の里なる梅見にものし侍り。聞きしにまさる景色にて、幾百本とも知れぬ梅花咲きみち、峰もふもとも白雪の積たらむが如し花間にきなく鶯はねぐらもとめて軒にとへづる雀の聲よりしげく、たどりゆく袖をあらふ春風さへ、あまる香りを身に送りて、心はさながらゑへる樣思はれ侍り。かゝる折に、君ゐまさば如何にうるはしき文の錦を、つづり出し給ふらん。拙なき身にて、腰折一つゝ浮び出す。いとも口惜しう、かゝる折にも思のいづるは、今までの身の、おこたりになん。つとにとて手折かへりし梅が枝とはに侍れども、送り參らせんすべなく、せめて影なりとも思ひ、もとめ歸りし、うつしへ一ぴら御目にかけまゐらせたれば、咲ける花に香りなく飛びかふ鶯の影は見ゑまつらずとも花と花との中を流るゝ谷川の深き心をくみとり給はゞ、いかばかりか嬉しうなん。あなかしこ。

吉田まさゑ子

鶯の聲も匂ひつ。春風に傳へまたゐる月が瀬の梅のたよりも、香はしく文机とおとなひて、ひらひらとおちくる寫し繪こそ、親しき友よりの惠みなりけり。いまだ、咲きそろはぬ梅が枝を、假の宿として、谷の戸いづる鶯の羽風をしたい、杖をひく雅び人もこれあるとかや。一目萬本を寫し出せし景色、得もいはず。人の心もすむ水の清き流れをくみとりて、ふでにいはする歌のごとく、歌人は、ゐながらにして名所を知るとか申候まゝ、妾ひとりにてながめんも、何とのうのこりなしく候まゝ、一葉御目かけ申候。あはれ麗はしき御言の葉そへ給はらば、妾の悦び、かつは、そを送りおこせし音の面目になん。あなかしこ。

大谷津保子

其後は、うちたえてみけしき伺ひ上げ奉らす、いと御遠々敷打過ぎし罪、日頃のゆるやかなる御心もて、幾重にもゆるし給ひてよ。さて、いぬる日大阪のしるべの許より、何やら小包の屆き侍りしかば、皆々打より開き候ひしに、其のわたりの名所の寫眞取揃へ、送りこせしにぞ、取手もおそしと打見しに、豐臣氏の城址、茶うす山、天王寺の風景より、須磨、明石の風光、住吉の浦曲の樣、あるは、もろもろの學校、大きやかなる建物、公園など數しれぬ程にて、實に開け行く御代の有がたさは、かゝる山里に住みゐる身も、居ながら名所の樣を見る事を得、いといとうれしう存ぜられ侍りぬ。其の内の數葉、ゑりぬき使にもたせまゐらす。霜深き夜の埋火の元の友ともなし給はゞ、こまならうれしうてなむ。かしこ。

臨時發刊

國光

人心の頽廢風俗の淫靡殆底止する所を知らず邦家の將來洶に痛憂に堪へざるものあり冀くは此の册子をして惰民社會に於ける半夜の警鐘たらしめむ。

◉**世界に於ける日本の地位及其現勢** 英露獨佛伊米列國の海外政策を詳論し、その內面に於ける强弱長短の秘密を發露して、東亞の天地、累卵の狀勢に及び、我が日本國の地位現勢燎然として、掌に指すが如く、一讀悚然、蝸牛角上の小紛爭、小利慾心を蟬脫して、猛然省察、邦家のために奮起するに至らしむる大文章なり

◉**日本教育の大本** 我が國、今日の教育は、諸國流行の寄せ集めにして、國家本來の特相に基きたる根本的主義精神の、未確立せざることを切論して、歷史上、地理上、倫理上、國家の天職上より、日本教育の基礎たるべき要目を列擧し、以て、世の熱誠なる教育家に質さむことを期せるものなり

◉**此の風俗の頽廢を奈何** 風俗矯正は、爲政の本源なることを論じ、當今の人心頽廢世風壞亂の原因する所を抉出して、その責の歸する所を痛言し、閣臣、元勳、文武官吏等、在上者の大反省を促し、憂世慨時の識者は此の際大に世道維持に盡瘁せられむことを企望せる苦言なり。

（劒光）**拜金主義と道德**（東久世通禧）**矯世危言**（渡邊國武）**憲政完美の要訣**（今井恒郞）**師弟の情誼と現行法律**（矢島浦太郎）**古今教育主義の難點**（黑川邦彥）**獨逸海外政策に感あり**（宮島申夫）**日本の國富と人民の負擔**（寺師宗德）**農家の有志者に告く**（樋田魯一）以上何れも皆沈痛剴切なる濟世の忠言

二月十一日
發行

（ウラニツヾク）

男爵高崎正風先生序　◎　本居豊穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美　自一巻至八巻　紙數壹千百頁　上中下合三冊

◎全三冊　正價壹圓五拾錢　遞送料　小包〇十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外二十四錢　四種郵便卅錢

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書これはかゝるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゑり巻となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もれて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとう摺り巻れしくて、こたひ我社にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類と日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、貫之朝臣のこの日しを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし、土佐の守に任され深きはその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解かしなから廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社　（電話新橋八八）

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替組行爲替及振込にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證券郵送料添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	拾錢	全國無遞送料	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢		
十二冊前金（半年分）	壹圓		

明治三十三年二月十九日印刷
明治三十三年二月二十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木良雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　（電話番號新橋八八）　國光社

(明治二十四年八月四日内務省許可)
(明治二十五年三月十二日遞信省認可)